ISSN 0387—3188

平成二十年六月三十日発行

萬葉

萬葉学会

萬葉にみる女・男……青木生子(一)
続紀宣命のケリと来……栗田岳(二六)
紹介
浅見徹著『万葉集の表現と受容』……坂本信幸(四四)
予告……(四七)
「萬葉」通巻目次(創刊号〜第二百号)……(四八)
筆者名による索引……(八四)

第二百一号
平成二十年六月

第二百号　目次

家持長歌における短歌との交渉……奥村和美
「尋常」考……山崎福之
——漢語考証の試み——
古事記「奉」字考……土居美幸
——「マツル」ということば——
書評
犬飼隆著『木簡による日本語書記史』……蜂矢真郷
橋本雅之著『古風土記の研究』……中川ゆかり
報告
予告

萬葉にみる女・男

青木生子

一　はじめに

記載されたものによれば、うたは原始・古代から、神々をはじめ人間の、男か女によってひとしくよまれてきた。ところで、小野小町の歌を「女の歌」と評して、歌のさまを男と女の違いをもって論じてみせたのは、紀貫之の古今集序がはじまりではないかと思う。この場合の性差による歌の評価自体は別として、ともかく最古の歌集万葉集には、以降の歌集に比べて、男女の性別を示す言葉がきわめて豊富なのが特色である。たとえば均衡とまでいえなくとも、作者に女が多いこと、男女それぞれの呼称が多彩である点などがあげられよう。

古代の歌の主体表現に、たとえそれが、はるか昔の共同体的場であろうと、個とか「私」としての「われ」の意識が、無意識裡にも潜在していたことを否定しえまい。まして「万葉を生んだものは、主観的な個人中心の精神」であり、「主観の強調、自我のめざめが抒情文学の生まれる動機である」といった土居光知の『文学序説』（昭和二年）の近代の考え方を万葉研究の通念とするなら、たとえば、同じ頃に、武田祐吉が『上代日本文学史』（昭和五年）のなかで、万葉は、人を指示する代名詞の多い歌集であることをあげ、「われ」の語が、古今集や新古今集をはるかに上まわる（とくに万葉巻十一、十二の古今相聞往来歌類と古今、新古今の恋の部との比較）という事実を指摘していることも注目される。この「われ」の用法、意識と関連して、歌の発生の基本的地盤に、「われ」と等価値的に人間生活の根源に根ざした言葉として、男・女に関するさまざまな呼称（呼び名）が生み出されてきた。

まず、男性や女性は、作者主体の側から、また他者の第三者の側から、直接的間接的にどのような言葉で示されているか。主なものに、万葉に固有な「ますらを」（大夫）、「たわ（を）やめ」（手弱女）や、「いも」（妹）―「児」、「せ」（背・兄）―「君」、そしてさらに広く、「をのこ」（男子・男）、「をとめ」（処女・未通女）などが

あげられる。これらは複合語として、また修飾語を伴い、実に多彩な表現を生んでいる。とくに直接呼称の「いも」と「せ」には、「わぎも(こ)」「わがせ(こ)」と「われ」が結びつくことが多く、親愛の情がこめられており、いとしい女、いとしい男への歌ことばともいえ、また、「妹と言はば無礼し恐ししかすがにかけまく欲しき言にもあるかも」(12・二九一五)と「いも」の使用には格別な思い入れがあったことが読みとれる。相対的関係をもたない「をのこ」(をとこ)」「をとめ(をみな)」に至っては、「つきひとをとこ」「ささらえをとこ」「つくよみをとこ」、「あまをとめ」「すがるをとめ」「ちぬをとこ」「うなひをとめ」「いせをとめ」「たまなをとめ」「にほへをとめ」「さかえをとめ」「とこをとめ」「おとひをとめ」「あづまをのこ」「あづまをみな」「あらしを」「みやびを」等々、ざっとみても他にまだまだ数えあげられるであろう。

これらの歌の中における用法は、実用的生活言語や歌ことば、また伝説上の呼び名などでもあって、すこぶる複雑多岐にわたるが、ともかく、万葉には、多彩な男女の群像がイメージされるというものであろう。そこで、万葉集において、男・女の立場からそれぞれがどのように歌われ、またどのような関係性で歌われているのか、等の男・女の問題を概観してみたい。

二　「ますらを」文学

(一)

ところでこうした万葉世界を、男・女の性別の視点で線引きしてみせたのは、江戸中期の国学者賀茂真淵であった。彼の発言以来、万葉は「ますらを」の男の文学であり、柿本人麻呂はますらを精神を歌いあげた代表歌人だと、これまでいわれてきて誰もがそう思ってきた。とくに近代に入って昭和の軍国主義時代に万葉はますらを精神で色どられたことは、私など記憶に新しく、第二次世界大戦後においては、古代文学見直しの一つに、西郷信綱氏に代表されるような「ますらを」を「官僚貴族」「男子官僚一般」と規定する論が出て、現在ほぼ定着化しつつあるといえる。歴史的実態はまさにそのとおりであろう。

それにしても真淵が、男の文学を万葉の中から「ますらを」という固有なキーワードとしてとらえ、「たわやめ」[1]の女の文学と対峙させ、「たをやめのをとめさび」「ますらをのをとこさび」「ますらをぶり」「たをやめぶり」の言葉を用い、男性的歌風、女性的歌風を論じ上げた(『万葉集大考』)のは、いわば単なる性差を意味しない文化的意義のジェンダー論の先駆的要素を内在しているとさえいえる。万葉集に対する真淵の「ますらを」論は、源氏

物語に対する本居宣長の「もののあはれ」論には及ばないものの、江戸時代の学者のうちたてた学問遺産の一つといっても過言ではないであろう。ただし真淵は、宣長と違って、彼の立論は、「いにしへ」の万葉集を「ますらをのをとこさび」たる歌風とし、のちの古今集を「たをやめのをとめさび」たるものと見、これを時代の前後に結びつけ、後者を排し、前者に価値ありとみなし、これを大いに宣揚することにあった。真淵の時代、歌は古今集的な女性的歌風に浴していた風潮に対し、彼が万葉の男の文学に価値を認めようとしたのは、あたかも、紀貫之が、今の世の色好みの家に埋れた女の文学を、万葉のような男の文学たらしめようとした志向と通底している。いわば、共に女の文学に対する男の文学の優位性の堅持である。その男の作者は、ひとしく宮廷歌人人麻呂のイメージであった。

万葉は果して、男の文学か、人麻呂は果してますらを文学か、改めて問い直してみる必要がありはしないか。この観点に立つとき、万葉の本質には一方で女性的なものが含まれている点を主張する論があることも看過されてはならない。近代も昭和に入って、万葉に「われ」の語の多用を指摘した先掲の武田祐吉に「女身萬葉」（『女身萬葉』昭和十四年）があるのをはじめ、続いて岡崎義恵の「万葉集における男性美と女性美」（『古代日本の文芸』昭和十八年、『万葉風の探求』岡崎義恵著作集4所収）などが注目される。また折口信夫には、特に「女歌」という語の早い用例が、武田の『上代日本文学史』と同じ頃の昭和の初めの「萬葉集研究」（日本文学講座第一九巻昭和三年、『折口信夫全集第一巻』所収）の中に頻出している。[2] これらは、それぞれニュアンスの異なる論調・論理であるが、昭和の第二次世界大戦以前のわが国が軍国主義時代にやがて入ってゆく風潮を背景にしており、とくに岡崎論文は、万葉がますらを文学一遍倒にぬりつぶされた時代であったことが省みられねばならない（岡崎には他に同様な論旨「ますらをぶりとたをやめぶり」（『文芸世紀』昭和十九年三月）がある）。

そこで問題をもとに戻して、まず柿本人麻呂の「ますらを」の歌を検証することを手はじめにし、万葉の女・男の問題を考究していきたい。

二

つのさはふ　石見の海の　言さへく　唐の崎なる　海石にぞ
深海松生ふる　荒磯にぞ　玉藻は生ふる　玉藻なす　靡き寝
し子を　深海松の　深めて思へど　さ寝し夜は　幾時もあら
ず　延ふ蔦の　別れし来れば　肝向ふ　心を痛み　思ひつつ
かへり見すれど　大船の　渡の山の　黄葉の　散りの乱ひに

妹が袖　さやにも見えず　妻ごもる　屋上の山（一には「室上山」といふ）の
雲間より　渡らふ月の　惜しけども　隠らひ来れば　天伝ふ
入日さしぬれ　ますらをと　思へる我れも　敷栲の　衣の袖
は　通りて濡れぬ　（2・一三五）

右は人麻呂が「石見の国より妻に別れて上り来る時の歌」の中の第二長歌（反歌二首略）である。石見相聞歌は人麻呂の唯一の相聞長歌である。そして人麻呂にとり唯一の「ますらを」のみえる作品である。第一長歌が別れた妹への愛着と一体感が激情的・行動的に歌われているのに対し、この第二長歌は、妹との別離の悲哀が求心的に歌われ、この相違は長歌の最後に凝集された「夏草の　思ひ萎えて　偲ふらむ　妹が門見む　靡けこの山」（第一長歌）と「ますらをと　思へる我れも　敷栲の　衣の袖は　通りて濡れぬ」（第二長歌）との対照においてまことに顕著である。「玉藻なす　靡き寝し子」と「さ寝し夜は　幾時もあらず」別れきて、「心を痛み」「思ひつつ」秋の夕暮れの山路をゆく作者が、「黄葉の　散りの乱ひ」を浴みながら「雲間」ゆく「月」のごとく「惜し」くも見えなくなってしまった妹を偲ぶ、折しも「入日」がさしこみ、あたりを一面に染める、旅人の情はここに極まって泣くのである。恋情に滂沱と涙を流すときに「ますらをと　思へる我れ」が重く切実なことばとして、打ち出されたのである。それは、「ますらをと　思へる我れ」なのに、だのに……と、「ますらを」の自覚がそれの反措定・否定のもとに引き出されてくるのである。つまり、「ますらを」男子たるべき「我れ」が、内面の矛盾と格闘し、つき動かされて、ひたすら愛する者への人間的真情を吐露するに至るのである。いいかえれば、ますらをの自負がむしろ自責のすがたをとって、愛の純粋強化の語法がとられたのである。

人麻呂の唯一のしかも重要な意をもつ「ますらをと　思へる我れ」をみてきたわけであるが、実は、これがすでに、人麻呂にはるか先行する舒明朝の軍王の歌の中にもみえることに注目せねばならない。

讃岐の安益の郡に幸す時に、軍王が山を見て作る歌

霞立つ　長き春日の　暮れにける　わづきも知らず　むらきもの　心を痛み　ぬえこ鳥　うら泣き居れば　玉たすき　懸けのよろしく　遠つ神　我が大君の　行幸の　山越す風の　ひとり居る　我が衣手に　朝夕に　かへらひぬれば　ますらをと　思へる我れも　草枕　旅にしあれば　思ひ遣る　たづきを知らに　網の浦の　海人娘子らが　焼く塩の　思ひぞ焼くる　我が下心　（1・五　反歌略）

この「ますらを」は、万葉のみならず上代文献中最古の用例であり、軍王は「ますらを」の自負を歌った最初の歌人であったこ

とになる。

しかし、この作は稲岡耕二氏の詳細な検討のもとに、人麻呂以降に作られたとする新見解が提出され、それに従ってよいと思う（「軍王作歌の論」『国語と国文学』昭和四十八年五月、「軍王の歌」『萬葉集を学ぶ』第一集昭和五十二年十二月）。ここには題詞も含めて、濃厚な官人意識としての「ますらを」意識をみることは容易である。これは、万葉後期の宮廷歌人になる従駕作に脈絡をもつ様式といえよう。

ひるがえって人麻呂の当面歌はどうであろう。官命を帯びた旅路であろうことは想像されるが、作品自体として題詞や歌中にそうした官人的要素はみられず、むしろこれを払底した人麻呂個人の私の抒情といえよう。(3)

ところで、ますらを我れを、かくもますらをならず嘆かせた相手の「妹」について、坂本信幸氏は、それが「石見国」という一地方の「鄙の女」を他人にはどうであれ、人麻呂個人にとってかけがえのない女性として歌っている点に注目し、「和歌史上に初めて個の抒情が登場するために必要な表現であった」と指摘したことは、この際きわめて重要である（坂本信幸「柿本人麻呂の表現をめぐって」『萬葉』百九十五号、平成十八年八月）。

女々しい悲しみに泣きぬれる「ますらを」による男の発見・出現と、このような「妹」による女の出現・発見がここにはある。それは人麻呂の自己主体の中に確立した、人間としての愛の文学というに他ならない。

男の文学の代表たる人麻呂の作品に歌われた「ますらを」を以上のように、まずおさえてみたが、(4) 人麻呂以前の男・女の歌のすがたはどうであろうか。

三　初期万葉にみる女・男

(一)

「初期万葉は女歌の時代である」といいきったのは、中西進氏である（『万葉史の研究』昭和四十三年、一九七頁）。「女歌」という言葉の特殊な意は後に述べることとし、いわゆる女性の作者が、男性作者にほぼ拮抗して多いことは、質は異るが、後に迎える天平万葉の女歌への脈絡を容易に考えさせる。しかし作者についていえば、初期万葉には、個人のすがたをはっきりみせていない作もあるので、作者の性別による厳密な腑分けは、むずかしいというべきであろう。一、二の例をあげてみる。巻一の雑歌における

やすみしし　我が大君の　朝には　取り撫でたまひ　夕には
い寄り立たしし　みとらしの　梓の弓の　中弭の　音すなり
朝狩に　今立たすらし　夕狩に　今立たすらし　みとらしの

梓の弓の　中弭の　音すなり　（1・三）

反歌

たまきはる　宇智の大野に　馬並めて　朝踏ますらむ　その草深野　（1・四）

題詞に「天皇、宇智の野に遊猟したまふ時に、中皇命の間人連老をして献らしめたまふ歌」とあるこの歌は中皇命（誰であるか不明であるが、舒明の皇女、間人皇女か）自身の作か、間人老（「孝徳紀」に見える遣唐使判官中臣間人連老か）の作歌かに疑問のあるものであり、また、

中皇命、紀伊の温泉に往す時の御歌

君がよも　我がよも知るや　岩代の　岡の草根を　いざ結びてな　（1・一〇）

我が背子は　仮廬作らす　草なくは　小松が下の　草を刈らさね　（1・一一）

我が欲りし　野島は見せつ　底深き　阿胡根の浦の　玉ぞ拾はぬ或いは頭に「我が欲りし子島は見しを」といふ　（1・一二）

右は、山上憶良大夫が類聚歌林に検すに、曰はく、「天皇の御製歌云々」といふ

の中皇命（三・四番歌と同一人物か別人か、決定をみない）が不明の上、左注によると「天皇」（斉明天皇）の御製という異伝が付されている。

また巻八に、舒明天皇の歌とある

夕されば　小倉の山に　鳴く鹿は　今夜は鳴かず　寝ねにけらしも　（8・一五一一）

は、巻九に雄略天皇の歌として小異歌が重載されている（9・一六六四、第三句「伏す鹿し」）。

このような作者に異伝や、複数の作者名をもつものを、「代作」（中西進の「詞人」説、伊藤博の「御言持ち歌人」説。「代作」「みことも ち」の言葉には、折口信夫が先鞭をつけているが）といった作者面からとらえ、また歌そのもののあり方として「歌の共有」（神野志隆光説）という視点からとらえる説もある。

作品に即してみてみよう。三・四番歌は「天皇」（舒明）の「遊猟」の折に献上された歌と題詞に記される。これが猟に出で立つ儀礼歌として豊猟を予祝する歌であることは間違いないであろう。しかし長歌から反歌を通して、とりわけ四番歌に至っては、「たまきはる」のリズムが広漠たる宇智の大野を呼びおこし、「馬並めて　朝踏ますらむ　その草深野」には、勢よく駆ける群馬をあやつって狩をする人の姿が、朝まだき狩場の爽快な光景として鮮かに生動している歌である。感覚の新鮮な現実性は、客観的な叙景歌のごとくであるが、これは狩場を想像している歌なのである。

内田賢徳氏の言葉をかりれば、「想像ということによって、まなざしの内側に絵のように写し出されている」「大君の優美な姿」なのであり、「呪術に替わる」「それこそ抒情の契機に他ならぬ」のである(『萬葉の知』)。

同じ舒明朝の天皇御製と伝える前掲の一五一一番歌は、雄略天皇ともまた、「岡本天皇」とある題詞から皇極(斉明)女帝と見る説もあり作者の真偽のほどは分らないのである。

妻を求めていつも鳴いている鹿の声が聞えないのにふと気づいたいぶかりを、「今夜は鳴かず」と、ただそのままに言いとどめ、「寐ねにけらしも」の中に、妻を得て共寝をしている鹿への想像に、自身の欲情を重ねて、しっとりと歌いこめている。このような愛のぬくもりというか、やさしい情感は、原始からぬけ出たばかりの古代人の心にして宿りえたものではないだろうか、と、かつて私は言い、古代的な人間性の醇乎たるすがたの詩的生誕を告げているものであるとみた。(「序説　万葉の抒情の流れ」『萬葉の抒情』青木生子著作集第五巻、平成九年、初「万葉歌の流れⅠⅡ」新潮日本古典集成『萬葉集二～三』昭和五十三年)

こうした作者異伝(歌の代作、共有)をもつ歌のありようは、自他の区別をもたない個我以前にあるものといえようか。またはむしろ、個人の感性が生れ出ようとする詩(抒情詩)の源泉をこれらの歌にみることができようか。かつて私はこれに思い寄せて志賀直哉の左の有名な言葉をあげたことがある(拙著『日本抒情詩論』昭和三十二年、『青木生子著作集第一巻』所収)。

夢殿の救世観音を見てゐると、その作者といふやうなものは全く浮んで来ない。それは作者といふものからそれが完全に遊離した存在となってゐるからで、これは又格別な事である。文芸の上で若し私にそんな仕事でも出来ることがあったら、私は勿論それに自分の名など冠せようとは思はないだらう。

(『現代日本文学全集・志賀直哉集』序・昭和三年)

この直哉の言葉を、実は西郷信綱氏が、『万葉私記(第一部初期万葉)』(昭和三十三年)の中で、この鹿鳴歌によせて引用しているのを、のちに知った。偶然の一致、共感とのみは思えないことである。

蛇足すれば、これらの作者は、男か女の性差を問うことなく、また歌われる対象のこの場合、四番歌の狩する男性のイメージは、剛健というより、内田氏もいうように、むしろ「優美」ですらある。鹿鳴歌の作者は、岡本天皇すなわち皇極(斉明)女帝より、男性の天皇のやさしい情感としてイメージされるのがふさわしくもある。むしろ天皇という、性差をこえた古代的人間像のイメージとして結ばれるものかもしれない。

恣意をめぐらせてもらえば、初期万葉の、男でも女でもありうるようなこうした歌の美しさを両性具有の美とでもいえないだろうか、と思う。両性具有の美とは、人間が男女に分れる以前のかたちで、一人の人間が両性を具備しているはずという、あくまで精神的な理想像である。それについて思いよせられるのは、かの救世観音もさることながら、広隆寺にある飛鳥時代の弥勒半跏像である。アルカイックスマイルをたたえた飛鳥仏の、「匂い立つような清々しい色け」（白州正子『両性具有の美』）とも表現されるこのすがたは、あえていえば女性的な男（少年）のすがたである。白鳳の美術様式の完成態たる薬師寺の諸仏像と通い合う人麻呂の円熟した男女の相聞歌が生れる以前のそれはすがたであった。

転じて、もうひとつの中皇命とある前掲の一〇～一二番歌をみてみよう。

紀伊（牟婁）の湯に行幸した折の作で、「君」「背子」と呼びかけられている人は、ここは中大兄をさすか。普通、「君」は男性に対する尊称。「背（子）」は女性から男性を親しんで呼ぶ言葉であるが、ここは、万葉相聞の歌にみるいわゆる、「妹」「背」の男女をさしてはいない。中皇命を間人皇女とすれば、「兄」の中大兄に対し、また左注のいう斉明女帝とすれば、子の皇太子に対して、「君」「背」とよんでいるわけである。「背（子）」は「兄」を意味する古代語であり、本来的には「兄」「妹」は血縁の男女の長幼をいう言葉であろう。イモ・セとしての妹と兄は、近親相姦やヒメヒコ制の神話的原型のひびきをもつ呪的性格をこの歌にも否定はできまいが、この歌の表現にはそこから離脱した、しかも男女の恋ではない、旅路の楽しみが初々しく生れ出ている。

以上、初期万葉の作者異伝の作を通して、その歌のありようをみてきたが、これらが雑歌の部に属しているのも、諸々の上で肯かれるのである。ところで、男・女の問題として、両者の関係性つまり相聞贈答歌の世界は、人麻呂以前にどのようなありようがうかがえるか。

（二）

私が、「萬葉にみる女・男」という演題について、何を思うかと学生に聞いたとき、即座に返ってきたのは、そりゃ相聞、恋の問題でしょう、という言葉であった。まさにそれに違いないものの、私にはかなり以前から考えてきたこの問題を、私なりにもう少し大きくとらえたい意図があるのである。

さて、初期万葉の相聞の歌を考えるとき、避けて通れないのが、折口信夫のいわゆる女歌論であることはもはや常識にすらなっている。相聞の起源に、古代歌謡にみる男女婚姻の民謡的集団的掛

け合い行事の歌垣の場を考え、この場において、歌い勝ち、負けまいと男の歌のあげあしをとり、切り返しをむねとするところに女歌の発生を折口は考えた。

そういう発想や内容をもつ女歌は、本当の恋愛やその実感を歌ったものではなく、そういう現実的な生活の上に成り立ってきた一種の「芸術でもない」のであるとし、「むしろ芸術になろうとする空想で、その空想で実感を持たしたもの」であるとも付言している（「古代生活に見えた恋愛」『折口信夫全集第一巻』他）。生活的実用性に歌を還元し、万葉の歌は恋愛の歌でないとする折口にして、空想・想像に連なる芸術（文学）性を一方でやはり認めていることになるのではなかろうか。私がこれまで初期万葉にみてきた歌のありようは、実用的目的性による呪術儀礼から脱皮しかけた詩的（抒情的）発生のすがたであることを繰返し述べる必要はない。

万葉巻二の相聞部には万葉最古の磐姫皇后の作が冒頭を飾るが、後人説に従い、実際は天智天皇時代から始まる。天智天皇（中大兄時代の早い頃か）の

妹が家も　継ぎて見ましを　大和なる　大島の嶺に　家もあらましを（一には「妹があたり　継ぎても見むに」といふ。一には「家居らましを」といふ）　（2・九一）

に「和へ」る鏡王女の

秋山の　木の下隠り　行く水の　我れこそ増さめ　思ほすよりは　（2・九二）

これを掛け合いの常套とみて「我れこそ増さめ　思ほすよりは」には相手に反発し威張っているところに注目すべきだと折口信夫は説くが（「万葉集の恋歌」『折口信夫全集第九巻』）、思いの深さで相手に勝つことをいうのは、ひねりをきかせた愛の強い表出そのものである。それを序の「秋山の　木の下隠り　行く水の」の忍びやかに流れる景に託して、形象化した主観の醇化は、女歌の秀歌として逸せられない。

初期万葉の時点で、こうした女歌の発生をきわやかに告げるものに額田王の歌をあげなければならない。

四　額田王——女歌の誕生

(一)

額田王は日本書紀によって鏡王の子であることが知られるが、額田王が額田女王と記されていないのは、やや古い表記法によっていると考えられ、れっきとした女性（日本書紀に「天皇（天武）初娶二鏡王女額田姫王一、生二十市皇女一」とある）歌人の統一した名として万葉には前面に出ていることは注目してよい。しかし王の作品には題詞に額田王の作とあっても、左注に異伝を記す七・八・一七・一八のごとき歌が近江朝以前にある。いずれも天皇との異伝

であることも、おおよそに先に見た初期万葉のあり方を代表するものである。

まず、異伝をもつ典型的な代作歌と考えられている熟田津と三輪山の歌から取上げてみる。

額田王が歌

熟田津に　船乗りせむと　月待てば　潮もかなひぬ　今は漕ぎ出でな　（1・八）

右は、山上憶良大夫が類聚歌林に検すに、曰はく、「……後の岡本の宮に天の下知らしめす天皇の七年辛酉の春の正月丁酉の朔の壬寅に、御船西つかたに征き、始めて海路に就く。庚戌に、御船伊予の熟田津の石湯の行宮に泊つ……」。……この歌は天皇の御製なり。……

左注にあるように右は、斉明天皇七年（六六一）百済救済のため、天皇の率いる軍船が西に向う途中、伊予の熟田津に碇泊した際の歌とみてよいと思われる。

この歌柄について、斎藤茂吉が、

この結句は命令のやうな大きな語気であるが、縦ひ作者は女性であっても、集団的に心が融合し、大御心をも含め奉った全体的なひびきとしてこの表現があるのである。供奉応詔の真髄もおのづからここに存じてゐると看ればいい。（『万葉秀歌上』）

といっているのは、作品形成の由来を代作の言葉こそ用いなくても、作品の性格をよくとらえている。その際、茂吉が「縦ひ作者は女性であっても」とコメントしているのは額田が女性であることへのこだわりであることに、それこそこだわりたいところである。一方の作者とされる者は、天皇にして女帝である。男女の性別をこえた存在としての「天皇」の作者や代作に関してはすでにふれたところである。この歌をおそらく天皇の声と人びとは聞いたであろう。しかも、「月待てば　潮もかなひぬ」は、船出の好条件をいい、航海の平安と士気を鼓舞するための実用語の働きを背後にもつ呪歌にせよ、これが想像の月の景とあいまって、集団的全体感情と一体になった念願を、感動の形象化へもたらしている。ここには額田の詩心ともいえるものが生れているとみるべきであろう。

額田王、近江の国に下る時に作る歌

味酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山の際に　い隠るまで　道の隈　い積もるまでに　つばらにも　見つつ行かむを　しばしばも　見放けむ山を　心なく　雲の　隠さふべしや　（1・一七）

反歌

三輪山を　しかも隠すか　雲だにも　心あらなも　隠さふべしや　（1・一八）

右の二首の歌は、山上憶良大夫が類聚歌林には「都を近江の国に遷す時に三輪山を御覧す御歌なり」といふ。……近江遷都に際して詠まれたとする三輪山の歌は、熟田津歌同様に、額田の巫女的代作歌人たる性格・実態がとらえられるものの、この歌の言葉は、雲にかくれた三輪山を、どこまでも見たい願望の実現化であるべき呪言とはうらはらに、願望が障げられている状態とそのうらみの心情の湧出に重心がおかれすぎている。呪歌の根本的性格である「うったへ」の要素ともみるだろうが、それは、はや、呪術的発想に結びつくより、むしろ呪術信仰と背馳し、葛藤する人間、個の心情の表出であるとみたい。自ら遷都を企てた天智天皇とて、大和の国魂の三輪山に対する愛惜の情にかわりなかるべく、そうしたすがたにおいて代作の意味を果たさなかったわけもないであろう。

しかし、「此長歌の体、男歌にて、額田姫王の口風（クチツキ）とは甚異也」（『万葉考』）という真淵の説は当らないのではないか。雲に対して、婉曲にまた激越に怨み訴えかける口吻、心の姿態には、あたかも女性的な情緒が纏綿していることを否定できない。

（二）

それにしても、以上の、古代儀礼とかかわった巫女・代作性とはうって代って、近江朝宮廷雅宴を舞台にした春秋争いの歌、

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶と秋山の千葉の彩とを競ひ憐れびしめたまふ時に、額田王が歌をもちて判る歌

冬こもり　春さり来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山を茂み　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木の葉を見ては　黄葉をば　取りてぞ偲ふ　青きをば　置きてぞ嘆く　そこし恨めし　秋山ぞ我れは　（1・一六）

は、題詞からも推定されるように、男文化の漢詩に対し、和歌を、さらに女を武器として課題に応えてみせた額田個人の顔と力量を顕示した作である。春秋両方に揺れ動きつつ最後の判決にせりあげてゆく心情表現の構造を解明した犬養孝氏の論（「秋山われは」『万葉の風土』）[5]があるが、氏は説明に当り、しばしば「女性的な心情の揺ぎ、迷ひ」「女性心理の愛情の機微」「女性らしい情感のこまやかさ」という言葉を添えている。もちろん異存はないのだが、氏の「女性らしさ」はあくまで「女性心理の自然」（「すぐれた」という修飾語がつく場合があっても）としてナイーブにとらえられ

ている。果して単なる自然の女らしさであるのだろうか。そもそも「女性らしさ」とは本質的にどういうことなのか。

犬養氏といわず、今の私たちもゆえなくしてもっている「女らしさ」、さらには「男らしさ」とは何を意味するか。この問題性は小稿の奥底に終始かかえているものであるが、今は立入らない。

春秋双方の肯定、否定にゆらぎ、迷い、ゆきつ戻りつ決めかねる過程は、はるか以前の歌垣の場におけるような、男と対等に選ぶ立場にある女であって、選ばれる受身の女ではなく、あれこれと相手方をじらし、引き寄せる魅惑のしぐさをあたかも思わせる。それは聴衆を前に巧まれた創作意識としての女の媚態表現でありはしないか。末尾におかれた最終判断「秋山ぞ　我れは」の「我れ」の個の表明こそ、女の歌の最初の女の確立を意味した。歌垣以来のいわゆる女歌の伝統の新しく文芸化されたすがたが王の歌であった。両性具有の美とは違う固有の女「われ」がうたわれた。

次の紫野の歌（1・二〇）や秋風の歌（4・四八八）に至っては、こうした女歌そのものと認めるにもはや異議はないであろう。

天皇、蒲生野に遊猟したまふ時に、額田王が作る歌

あかねさす　紫野行き　標野行き　野守は見ずや　君が袖振る　（1・二〇）

皇太子の答へたまふ御歌

紫草の　にほへる妹を　憎くあらば　人妻故に　我れ恋ひめやも　（1・二一）

額田の歌は愛する人の袖振る所作に心を動かしながら、人目をはばかり、それをたしなめ、否定することが、かえって男の心をかきたてる媚態となって最大限に盛りあげられている。男の歌いかけと同等な、ここは女の額田の呼びかけに挑発されて受けて立ったというかたちが、「皇太子」大海人皇子の「紫草の　にほへる妹」云々である。女の否定のことばを否定し返す力強い、まさに予期されていたような、懸想する男歌を引出したのが、額田の魅惑的な女歌なのである。つとに真淵は春秋判別歌に「をみなごころのをかしき」（『賀茂翁家集巻之三』）すがたをみ、蒲生野の額田を「風流人なれば戯の様して」かくはうたったと看破した。この作は額田がその日の行楽にちなむ恋の一場面をもっとも魅惑的な女歌たらしめんとしたいわば「みやび」の戯れの「うそ」の演出なのである。

さて、同じ近江朝時代の作と思われる

額田王、近江天皇を思ひて作る歌一首

君待つと　我が恋ひをれば　我がやどの　簾動かし　秋の風吹く　（4・四八八）

については、先の春秋判別歌や蒲生野の歌が雑歌として、公的な

場にかかわる、しかも個の女の歌のあり方が見られるとするなら、これは醇乎たる相聞の歌として、独白的詠嘆の濃いすがたをとっている。ここでは前掲歌の大海人皇子とこの近江(天智)天皇との、額田王をめぐる人間関係を詮索することには意味がなく、これは初秋の風のそよぎのなかに、女心の永遠に君「待つ」すがたをもっとも美しく表現した創作なのである。「秋」に「飽き」をかけ、男に捨てられる嘆きを歌った平安朝の女の嘆きはここにはない。

「待つ恋」の歌といえば、万葉最古の仁徳天皇の磐姫皇后の

磐姫皇后、天皇を思ひて作らす歌四首

君が行き　日長くなりぬ　山尋ね　迎へか行かむ　待ちにか待たむ　（2・八五）

かくばかり　恋ひつつあらずは　高山の　岩根しまきて　死なましものを　（2・八六）

ありつつも　君をば待たむ　うち靡く　我が黒髪に　霜の置くまでに　（2・八七）

秋の田の　穂の上に霧らふ　朝霞　いつへの方に　我が恋やまむ　（2・八八）

の歌が「相聞」の巻頭を飾るにふさわしい女歌として据え置かれた。それは、記紀にみる仁徳期の磐姫像とは全く異なる、男を「思ひて」ひたすらに「待つ」女の恋のさまざまな思いの推移が配列され、万葉当代の女歌の典型・規範としてあげられた、のちの仮託歌である。それは、歌垣のような男の歌い掛けにおける女の切り返しや拒絶と違い、いったん選ばれ結ばれたのちの女の立場で男を待つ恋の、もう一つの女歌のありようとその流れをうかがわせるのである。額田王の歌に萌芽をもつ、この二つの流れは、根底で一つにないまじりながら、天平の万葉後期に、女歌はそのピークを迎えるのである。

天智新朝の開始と同時に女の専門歌人として女歌を創始した額田は、天智崩御の葬儀に際して、側近の女性たちと共に挽歌をよみ、その最終段階において「大宮人」の悲しみを代表する立場で、長歌を詠じた(2・一五五)。かつて皇族(斉明・天智)になり代ってよんだ額田は、いままた新しい公的な立場をうちたてたところで、次期持統朝の柿本人麻呂という男性歌人へと場をゆずり渡した。

以上の歌々のあり方をもって「初期万葉は女歌の時代である」と認めることもできよう。

五　柿本人麻呂——女の描写

天武・持統朝に入って額田王のあとを受け、公的儀礼に絡むすぐれた宮廷賛歌を多量に歌いあげたのは、いうまでもなく柿本人麻呂という男性歌人である。それは紀貫之の尊仰する晴れの男の

文学である。ところで、人麻呂作歌を概観すると長歌短(反)歌を合わせて約九十首中、部立面からみると挽歌三十五首、雑歌三十四首、相聞十六首で、相聞の歌は約十七パーセントにすぎないが、公的儀礼的要素を帯びる雑歌や挽歌の中にも、相聞の恋愛的個の要素がふんだんによみこまれている。

公的儀礼歌において、現実の王権としての「大君」「わが(こ)大君」という賛美の言葉を盛んに用いる一方で、人麻呂は私的な「妹(子)」「わが妹」の言葉をほぼ同数に多く用いて、愛の嘆きを歌いあげた。それに、人麻呂の名をもつ柿本人麻呂歌集には約三七〇余首の中、約六十パーセントが相聞の歌で占められ、ここには、人麻呂の作および彼の息吹のかかった歌が多数含まれていることも近時定説化しつつある(拙稿「人麻呂歌集における女歌」『伝統と変容』平成十二年、など)。

わけても人麻呂歌集歌に作者未詳歌を含む巻十一、十二の古今相聞往来歌類の中には、百首中、三十八パーセント以上の「われ」の言葉の使用がみられるという武田祐吉の指摘(前掲『日本上代文学史』)とともに、さらには、その「われ」が男女間で「君」に「妹」に、ひたすら「恋ふ」という言葉が盛んに用いられた。愛の抒情詩のもっとも祖型というべきすがたがここには生れているのである。巻十一、十二の人麻呂歌集及び作者未詳歌群が、人麻呂作歌の土壌に、また核心に関係し合っていることを見逃すわけにはいかない。そこには天武・持統朝の宮廷社会における男女による一種の恋愛文化の発生基盤が想定できないであろうか。

人麻呂の、男女別離を主題にした石見相聞長歌こそ、こうした文化の中で営まれ、練り上げられた傑作といえよう。「一地方の鄙の女」に対する「ますらをと　思へる」「我れ」の嘆きこそ、先にもいったように「ますらを」の、人間としての男の愛の確立と宣言を意味するものに他ならないと思う。

それでは、人麻呂は〝男の愛〟の対象である女の表象、イメージをどのように歌っているか。石見相聞歌には、第一、第二の長反歌(2・一三一～一三七)のすべての歌の中に「妹」の言葉がよみこまれ、題詞の「妻に別れて」とある「妻」の言葉は、用いられていない。愛する妻への思いをこめているのが「妹」という歌ことばである。(泣血哀慟歌も題詞にある「妻」を用いず、歌中はすべて「妹」である。)「石見の海」によせて第一長歌に「波の共か寄りかく寄る　玉藻なす　寄り寝し妹」と歌われ、第二長歌にも「荒磯にぞ　玉藻は生ふる　玉藻なす　靡き寝し子」と睦み合う女の姿態が歌われている「妹」のイメージが、石見相聞歌の核心であることはいうまでもない。もとは人麻呂歌集の、

水底に　生ふる玉藻の　うち靡き　心は寄りて　恋ふるこの

ころ　　（11・二四八二、女の立場の歌か）

敷栲の　衣手離れて　玉藻なす　靡きか寝らむ　我を待ちかてに　　（11・二四八三、男の歌）

あたりから発想の脈絡をうかがえるが、いっそう独自な官能的エロティックな女態（恋愛）表現として、定立していくのである。

相聞と表裏をなす挽歌、妻の死を歌う泣血哀慟歌にも「沖つ藻の　靡きし妹」（2・二〇七）と歌われ、さらには川島皇子の殯宮挽歌（一九四）や、明日香皇女の殯宮挽歌（一九六）にも同様に歌われている人麻呂の特徴的な男・女の愛の姿態表現である。

次の作も、人麻呂的な女性描写である。

伊勢の国に幸す時に、京に留まれる柿本朝臣人麻呂が作る歌

嗚呼見の浦に　舟乗りすらむ　をとめらが　玉藻の裾に　潮満つらむか　　（1・四〇）

釧着く　答志の崎に　今日もかも　大宮人の　玉藻刈るらむ　　（1・四一）

潮騒に　伊良虞の島辺　漕ぐ舟に　妹乗るらむか　荒き島みを　　（1・四二）

これは行幸にかかわる歌であるが、人麻呂は京に留まって従駕した女を思いやっている発想である。旅の展開のなかで、旅にいる女性への思いを「をとめら」「大宮人」（女官）「妹」という呼び名で焦点をしぼりこんで、イメージを紡ぎ出している。すなわち裳裾の濡れる姿に女の官能美を想像し、男のあこがれと賛美をよせている歌である。男にとって心ひかれるこの情景は、

住吉の　出見の浜の　柴な刈りそね　娘子らが　赤裳の裾の濡れて行かむ見む　　（7・一二七四　旋頭歌、人麻呂歌集）

や

黒牛潟　潮干の浦を　紅の　玉裳裾引き　行くは誰が妻　　（9・一六七二、人麻呂歌集）

といったやはり人麻呂歌集歌と通じる、その源ともいうべき点において、魅力的な女性描写として定着していたとみてよい。後の大伴旅人が松浦川遊覧の虚構作の中で、松浦の川に鮎を釣る「娘子」を「紅の　裳の裾濡れて」（5・八六一、他に八五五参照）というイメージで捉えているのも、人麻呂の女性描写の流れを汲む創作であることはいうまでもない。

人麻呂の歌（1・四〇）は天平八年の遣新羅使に誦詠され（15・三六一〇、「玉裳」が「赤裳」に）、広く愛誦された、当時でも印象深い歌であったらしい。

六　「ますらを」と「たわやめ」

(一)

想像と羨望によって構成された人麻呂作の女性表現は、次期の山部赤人の

ますらをは　御狩に立たし　娘子(をとめ)らは　赤裳裾引く　清き浜びを　（6・一〇〇一）

によって、「ますらを」と「娘子」とを対峙させて、くっきりと絵のように、男・女のすがたが描き分けられた。「ますらを」は、従駕の官僚貴族・男性であり、「娘子ら」は従駕の女官たちをさし、それは現場の風景というより、空想し虚構された宮廷賛歌の意味合いを帯びた作であることも間違いない。

そこで、これも行幸従駕の作において、「ますらを」と「たわやめ」の言葉を用いた笠金村の作を次にみてみたい。

名寸隅の　舟瀬ゆ見ゆる　淡路島　松帆の浦に　朝なぎに　玉藻刈りつつ　夕なぎに　藻塩焼きつつ　海人娘子　ありとは聞けど　見に行かむ　よしのなければ　ますらをの　心はなしに　たわや女の　思ひたわみて　た廻り　我れはぞ恋ふる　舟楫をなみ　（6・九三五　反歌二首略）

旅先の「海人娘子」に宮廷官女への思慕を重ねて、ここには人麻呂と違って、「ますらを」の「心はなし」と恋の嘆きを詠む宮廷官人意識がはっきり定着していることを示すと同時に、感動の薄い文雅化された「ますらを」のすがたになっていることを否めない。かの軍王の歌（1・五）が、このあたりに結びつくと前に述べたのも、こういったすがたにおいてである。「ますらを」であるべき男心が弱くも恋のため失われてしまったことを示すものが、万葉集中六十六例ほどある「ますらを」の歌の中で、約半数を占める。

ますらをの　現し心も　我れはなし　夜昼といはず　恋ひしわたれば　（11・二三七六、人麻呂歌集）

巌すら　行き通るべき　ますらをも　恋といふことは　後悔いにけり　（11・二三八六、人麻呂歌集）

剣大刀　身に佩き添ふる　ますらをや　恋といふものを　忍びかねてむ　（11・二六三五）

天地に　少し至らぬ　ますらをと　思ひし我れや　雄心もなき　（12・二八七五）

ますらをの　聡き心も　今はなし　恋の奴に　我れは死ぬべし　（12・二九〇七）

などという歌は、巻十一、十二の相聞歌の中に特に多い。「ますらを」は剛強であり、[6] 雄大であり、のみならず聡明であるべきな

のに、女性化してしまうことを歌っている。金村の歌は、これを「たわや女」の語を持ち出し、「思ひたわみて」（思いしおれて）といっている。見方によっては男性優位の上に立っての男性的精神の喪失を宣言しているかのごとくである。女性化によって恋情が強調されているとはいえ、かの人麻呂の「ますらを」（一三五）の嘆きの愛の真情からは、何ほどかの変容をきたしているとみざるをえない。

さらに金村には「娘子に誂へらえて作る」（女に頼まれて代作した）という設定で、家に残った娘子（たわや女）の立場から行幸従駕の旅先にある夫、男性を思うという特異な内容の歌がある。

大君の　行幸のまにま　もののふの　八十伴の男と　出で行きし　愛し夫は　天飛ぶや　軽の路より　玉たすき　畝傍を見つつあさもよし　紀伊道に入り立ち　真土山　越ゆらむ君は　黄葉の　散り飛ぶ見つつ　にきびにし　我れは思はず草枕　旅をよろしと　思ひつつ　君はあるらむと　あそそには　かつは知れども　しかすがに　黙もえあらねば　我が背子が　行きのまにまに　追はむとは　千たび思へど　たわや女の　我が身にしあれば　道守の　問はむ答を　言ひやらむすべを知らにと　立ちてつまづく（4・五四三　反歌二首略）

すなわち「大君の　行幸のまにま」「出で行きし　愛し夫」は、旅路の風景をたのしみながら「にきびにし　我れは思はず」と馴れ親しんだ私のことなどまるで考えもせず、「旅をよろし」と思っているだろう。そんなあなたと気づいているけれど、黙って待っている気持になれず、「我が背子が　行きのまにまに　追はむとは　千たび思へど」「たわや女の　我が身にしあれば」と、叶わぬ嘆きをうったえている。娘子の代作を装った創作の中に、うがった女の心理・感情を歌っているといえよう。それは「たわや女の　我が身」という言葉に収斂される内容のものである。「娘子」が追いかけていくことができないと嘆くとき、旅のよさを満喫している男性官人の羨しい姿が対照的に浮かび上がり、「実際に行幸に従駕していた官人たちの優越感をくすぐるようなもの」とみた倉持しのぶ氏の説も首肯されるのである（倉持しのぶ「旅を宜しと」―笠金村「娘子に誂へられて作る歌」についての考察―」『日本文学』二〇〇五年九月）。

人麻呂に続いて、女を金村も大いに詠み、人麻呂に用いられなかった「たわやめ」の語が二例出現し、それと対比的に男性優位の心情を潜ませてきた。[7] それは、男性が女性にゆえなくもっている優位性というより、次第に整備化されてきた律令体制下における官僚意識（男女の関係性）と無縁とはいえないであろう（飯田勇「男・女関係としての宮廷と文学―『万葉集』の「ますらを」「みやび

を」を視座として―」『古代文学』38、一九九八、平成十年度、参照)。

金村が「たわや女の　我が身にしあれば」と女の立場になって嘆いたのは、女が「ますらを」を、

ますらをは　友の騒きに　慰もる　心もあらむ　我れぞ苦しき　(11・二五七一)

と歌って、わが身を嘆いた点とまさにあい重なる。外で紛らす男と違い、ひたすら相手を思っている内向的抒情、このあたりが以後の女歌の一面のすがたを形成していくのではなかろうか。

(二)

それでは「たわやめ」は万葉集にどのように歌われているか。まず、万葉全体においては、「ますらを」の語が六十六例ほどあるのに対して、「たわやめ」の語は十例である。先の金村作(6・九三五)のような一首中に両者の対照も見られる(他に4・五八二、坂上大嬢)が、数量の上からみると、万葉では男性への関心は女性に対するよりもはるかに多大であったと一見いえそうである。しかし、両性をあらわす語として著しいものは、男の方では「ますらを」をはじめ「をとこ」「をのこ」「を」が多く、女の方では「たわやめ」はわずかでも、「をとめ」「をみな」「め」がきわめて多く、総数からいえば相匹敵している。

万葉における男女両性への関心はまず優劣がないとし、真淵の男性主義を批判したのは、岡崎義恵である(前掲「万葉集における男性美と女性美」『古代日本の文芸』)。氏は万葉集の中に、男性的なものと女性的なものとを実証的に吟味し、男性美と女性美とは、万葉集中に並び存していて「いずれが優位であるかということは容易に論じ難い」とし、真淵のますらを讃美の男性主義を否定した。岡崎は、万葉を芸術の美的形象面から扱っているのに対し、小稿ではどちらかというと抒情詩の主体の「われ」の感情的、心理的精神面から、女・男の自覚、発生のすがたを時代の流れにそってみてきたが、人麻呂において、男女の根源たる人間としての真情「愛」の精神の表現に至っている点を、岡崎と同様私なりに認めたことになる。それはすなわち「ますらを」精神との相克・消失、ますらをの女性化に広く通底するものに他ならない。

さて、万葉後期に入ると、先の金村作のように「たわや女」が「ますらを」と対に歌われた時、「たわや女」の方は、女性の弱々しい特徴が強調され、むしろ短所が示されているとみられなければならないだろう。男性が女性を「たわやめ」の語を用いて讃美した例はないのである。その点、真淵は「ますらを」を賛美するために「たをやめ」を取出したことは適切でなく、事実万葉の中で、男を賛美する場合には「ますらを」の語がもっとも多く用い

られ、女を賛美する場合には「をとめ」の語がもっともしばしば選ばれているのである。

しかし、金村の歌(五四三)には、女の代作としてたわやめの弱々しい恋情の中に、「たわや女の　我が身にしあれば」という「われ」の内に向けた言葉を、述べているのに注目され、また

ひぐらしは　時と鳴けども　片恋に　たわや女我れは　時わかず泣く　(10・一九八二)

たわや女は　同じ心に　しましくも　やむ時もなく　見てむとぞ思ふ　(12・二九二一)

逢はむ日の　形見にせよと　たわや女の　思ひ乱れて　縫へる衣ぞ　(15・三七五三)

などというのは、女性の弱さをみずからみとめ、嘆きつつ、その弱さの中からすくいとられる恋の陶酔と強さが、一種美的な女性像を結んでいるのを見逃すわけにはいかない。

七　女から男へ——男女の関係性

「ますらを」はそれを反転させることによって、制度や公的宮廷社会と結ぶ剛強さや理性を失わせる恋の力が、強調されることが多くあり、また「たわやめ」においては、女の本性とされる弱さ、幼さをそのまま受け入れて強調することによって、男を魅きつける媚態を演ずるような相聞の恋歌がいくた生れ、女歌の一つの要素を形成していったといえよう。巻十一、十二の人麻呂歌集や奈良朝の作者未詳歌群を集めた相聞恋愛歌群には、そうした男女の関係性の実にさまざまなすがたが歌われている。しかも、その心は、相聞歌であれば、女と男とが一対一の関係において、我れ汝を愛すという以外の何物でもなく、男女のおかれたさまざまな環境や条件を除けば、男女の恋情は、果てしなく繰り返して飽くことない、一般的普遍的なものである。これが恋というものであり、愛というものの本質からは至極当然でもあろう。

愛の唱和の始まりである古事記国生み神話のイザナキとイザナミは唱える順序を替えて、男女の呼称を異にしても「あなにやし」云々と愛の言葉は同じであった。しかしこの言葉をめぐって女神が先に言葉を発したのはよくないのでやり直しをするという話には、何やら万葉の持統・文武朝頃の律令社会の儒教的な文化背景を思わせなくはない。さらに、歌の起源とされる男女の歌垣は、男の歌いかけに対応する女の返し歌のあり方として説かれるが、女の方から誘いかけることもあったことが想像され、実際万葉の中にもこの例がなくはない。男も女も恋は対等であった。

であれば、「わがせ(君)」、「わぎも(わが妹)」と呼び合う歌の中で、「すべなし」「恋死」といった恋のキーワードは、女の歌の中

にも、男の歌の中にも盛んに用いられた。「妹」と「背」を入れ替えるだけで、どちらにも通用するような、この種の歌も多い。万葉の作者未詳歌をみると、男の歌か女の歌か区別のつかない歌が多数ある。このようないわゆる中西氏のいう「名もなく美しい」「私」の恋歌（『万葉史の研究』）を集めた巻十一、十二の歌々は、「男」と「女」の間で奏でる恋の相聞であるからには、同質の内容感情であるとはいえ、なお男の心が、女の心が、さまざまなニュアンスによって表現されていることもまた看過できない点である。

たとえば伊藤博氏は、巻十一の人麻呂歌集・出典未詳の「正述心緒」を男の歌・女の歌にことごとく帰納せしめ、冒頭歌が「女」の歌であること、女の歌群の次に男の歌群がくるという順序を、いくたびか繰り返すという配列方法を見出している（「正述心緒の論」『萬葉集の歌群と配列上』第二章第一節）。そして女の歌は半数以上を上廻り、しかも女の歌が優位に立っている事実を指摘している。おそらく人麻呂の手によって、正述心緒と寄物陳思という表現分類の高度な文芸意識のもと、心を規準とする正述心緒を優先させ、その配列が、万葉相聞歌の配列の一つの方法として確立したとも伊藤氏はみる。氏のいわれるようにそれは「まずは女の心を核とし中心にするという姿勢の現れである」（「女から男へ」『萬葉集の歌群と配列下』第十章第一節）ことは、編纂や構成面からのみならず、小論の立場や主調においてもまことに貴重である。

八　大伴坂上郎女――天平の女歌

(一)

さて、万葉も後期に入って、奈良・天平文化を代表する女の歌人はいうまでもなく大伴坂上郎女である。額田の歌が近江朝宮廷文化の中に咲き初めた女歌であるとすれば、郎女の歌は天平文化の社交の中に咲き誇った女歌であるといえよう。いわゆる男女性別を無化した代作、もしくは歌の共有世界を抜け出て、額田は女の歌を自立したとすれば、郎女は有名無名の多くの女の歌と身近かにかかわり、共有するなかから、歌に磨きをかけて、成熟していった。

彼女も女性歌人の例にもれず、相聞の男・女の恋の歌が多数を占めているが、藤原麻呂に和（こた）えた四首（4・五二五―五二八）の他は、実際の男女間の恋に当る歌ではない。女歌の特性や系譜は、男女の関係性、つまり恋の世界を地盤にしているが、必ずしも恋の実体験とは限らない虚構性のあることを、これまでもすでにふれてきた。その最たるものが郎女の女歌である。

そこで彼女には、男性の人麻呂や金村に伍して、相聞の長歌があることは注目してよい。しかもそれはストレートに「怨恨歌」という主題をかかげる女歌である。

大伴坂上郎女が怨恨歌一首并せて短歌

おしてる　難波の菅の　ねもころに　君が聞こして　年深く　長くし言へば　まそ鏡　磨ぎし心を　ゆるしてし　その日の極み　波の共　靡く玉藻の　かにかくに　心は持たず　大船の　頼める時に　ちはやぶる　神か離くらむ　うつせみの人か障ふらむ　通はしし　君も来まさず　玉梓の　使も見えず　なりぬれば　いたもすべなみ　ぬばたまの　夜はすがらに　赤らひく　日も暮るるまで　嘆けども　験をなみ　思へども　たづきを知らに　たわや女と　言はくもしるく　たわらはの　音のみ泣きつつ　た廻り　君が使を　待ちやかねてむ　（4・六一九）

反歌

初めより　長く言ひつつ　頼めずは　かかる思ひに　逢はましものか　（4・六二〇）

万葉には、他に、紀女郎の「怨恨歌」と題する短歌三首（4・六四三～六四五）があり、天平期を代表する女性歌人の二人が同じ主題を選んだ作歌であることの意味は大きい（佐野あつこ「主題化される女歌―『怨恨の歌』の位置付け―」『上代文学』第八十五号、平成十二年十一月、など参照）。

「怨恨歌」と題した郎女の文学志向は、中国の玉台新詠などにある怨詩に学び女の悲哀を虚構化したものといえる。と同時に、男と女の、ある意味では典型的な関係を、伝統的な歌の表現を受けついで構成し、「たわや女」の女の立場で抒情化した、この作は、まさしく女歌そのもののすがたに他ならない。

恋の世界へ誘いこみながら去っていった男に対し、結びつきを求め恋慕する「待つ」女の心である。「うらみ」は、「待つ」という表現と表裏一体、不可分なのである。女の歌に固有な「待つ」思いや姿（女の主体からはもとより、男の視線を通しても形づくられた女人像である）を無数に収めた巻十一や十二の作者未詳の歌々と、類歌類想関係をもちつつ、相手を求め「待つ」表現の行きつく末が恋のうらみに収斂されたのが郎女の歌であった。そして反歌にみるような、はじめから信じなければ、「かかる思ひに　逢はましものか」という自己の内部に向っての「つぶやきのようにうたう」（浅野則子『大伴坂上郎女の研究』）恋のあきらめ、否定に連なっていくのである。

こうして、男と格差のある女の立場の弱さ、苦悩を歌うところには、かの前掲「ますらをは　友の騒きに　慰もる　心もあらむ

我れぞ苦しき」（11・二五七一）のような、また平群女郎の

松の花　花数にしも　我が背子が　思へらなくに　もとな咲きつつ　（17・三九四二）

のような、ジェンダー意識の萌芽を背後にうかがわせるのである。しかもこれは同時に、男への媚態に通う表現ともなっている女歌に他ならないのである。

次の「大伴坂上郎女が歌六首」（4・六五六―六六一）も、実際の対象の男を詮索する必要はなく、はじめの

我れのみぞ　君には恋ふる　我が背子が　恋ふといふことは言のなぐさぞ　（4・六五六）

といった自分の恋の強さをもって相手をはげしくなじる語気のなかに、恋の不信の嘆きを否定できず、最後の

恋ひ恋ひて　逢へる時だに　うるはしき　言尽してよ　長くと思はば　（4・六六一）

は、「恋ひ恋ひて」の畳みかけ、「逢へる時だに」の「だに」の逢瀬のまれな愚痴めいた強調、「言尽してよ」の「よ」の哀訴の響き、「長くと思はば」と倒置法で念をおしたところ、恋慕・怨恨・不信・哀願の媚態を散りばめた、女歌の技法を達者に駆使した作といえよう。

これまで「女歌」、「女の歌」を同様の意にしばしば用いてきた。しかし、女歌とは、ただ女性が詠んだ女の歌をさすだけでなく、男を対象におき、男と対峙した歌であり、歌垣に源泉が求められるような、相手の男への反発、切り返しといった、もともと女の歌に特有の発想や表現によった歌のことをさしている。そこから生れる恋のあらゆる思いや、魅惑的なさまざまな言いまわし、しぐさを女の武器にして、郎女は虚構の恋歌、戯歌で社交をたのしみ、親睦を密にしたのである。

郎女周辺の女性たちが、相手の男（家持）との閉じられた世界の中でのみ、女の恋の悲哀を深めていく女歌に比べて、郎女は、実際の男のあるなしにかかわらず、女の魅惑を発散させた女歌を作り、それは親族間のみならず天皇（男帝・聖武）や公の世界にまで及ぼし、歌うことで、そこに女と男の世界を形造り、女の恋の歌の力を広げてゆくのである。郎女こそ誰よりも女歌の一流名手であるゆえんである。

そもそも歌垣における女の切り返しの歌から発したものながら、広くは、相聞、贈答における固有の作法として、表現の機微を深く追求してみせた鈴木日出男氏は、女歌の論（「女歌の本性」『古代和歌史論』一九九〇年、「女歌の形成―坂上郎女を中心に」『高岡市万葉歴史館論集10』二〇〇七年）にあたって、あえて折口信夫の文献をあげていない意味もこの際うなづかれるというものである。

（二）

また、異性間の恋以外に「恋」の語を使用し、女歌的表現をふんだんに発揮し出したのは郎女あたりからで、偽装された恋の歌、女歌が天平のみやび文化に機能してゆくその仕掛け人は郎女であったと思われる。こうした天平の文化圏は、当然大伴家持の文芸精神に重要な意義をもたらしていることはいうまでもない。

万葉集中「ますらを」の語をもっとも多く使用した家持（万葉の「ますらを」六十六例中二十一例）は、失われかけた「ますらを」の高揚精神を熱心に歌う一方で、

奥山の　八つ峰の椿　つばらかに　今日は暮らさね　ますらをの伴　（19・四一五二）

と歌う。遊楽に身をやつす「ますらを」は、「みやびを」（一二九五、一四二九など）となにほどの違いもないのである。

そして万葉にみる家持が、きわめて多くの女性たちと相聞の贈答歌をかわしているすがたは、平安文化の光源氏のすがたさえ想像させはしないだろうか。

女の手による女の文学、源氏物語には、男の視線からとらえられる美しい女人群像の背後に、女側の恋の不信と否定への道程がひそかに重要なテーマとして貫かれている。万葉の女歌からは、そのような源氏物語の虚構文学が、ついそこに見えてくるというのもあながち思いつきではないであろう。

九　おわりに

大風呂敷を広げた序でに最後に、なお一言駄足させていただく。たとえば現代の評論家の加藤周一氏が「日本の土着思想の焦点は……何よりもまず『恋』であった」（『日本文学史序説上』一九九九、初版一九七五）といい、また、恋歌を日本の基層文化とみる丸谷才一氏（『日本文学史早わかり』一九七八、『恋と女の日本文学』一九九六）などの見解を、大方に私は首肯したい。

日本文学の源泉である万葉集においては、男女の「恋」と、恋の核をなす女性的なもの「女」と、これの表現形態たる抒情詩「歌」との「恋・女・歌」の三位一体を万葉の本質とみる考えを、私は以前から持論にしてきた。いってみれば凡庸な常識的見解であろうが、私の研究遍歴がこのような問題にいつも立ち帰ってくるのである。しかし今回の小稿にもそこに多少の私なりの新見が加味されていれば、と願うわけである。（二〇〇八年三月記）

注

（1）「たわやめ」は、「手和也女（たわやめ）」（4・五八二）の仮名書きの例の他に、「手弱女」「幼婦」などのあて字の表記がされている。たわむ、

やわらかくしなう、の意とも同源で「たをやめ」ともいう。万葉の例は「たわやめ」と訓んでよいであろう。ただし、参考文献に「たをやめ」とある場合には、引用の際そのままを用いた。

(2) 折口信夫のいわゆる「女歌」の言葉を広く流通させたのは、昭和二十六年一月「短歌研究」に発表された「女流の歌を閉塞したもの」であった。

(3) もちろんこの石見相聞歌も宮廷サロンに提供された公的意味のあることを無視するわけでないが、いまは歌自体の詩的ありようそのものを問題にしていることを念のため付言する。拙稿「人麻呂の恋愛歌の意義」『和歌文学研究』第六号昭和三三年八月、その他。

(4) 拙稿「ますらを意識—人麻呂の歌は『ますらを文学』か」『国文学解釈と鑑賞』昭和四十八年九月、「人麻呂の『ますらを』意識」『青木生子著作集第五巻』所収。他に内藤明「『万葉集』の「ますらを」と「たわやめ」」『早稲田人文自然科学研究』第五十号一九九六年十月、など参照。

(5) 講演後、毛利正守氏から、犬養論と対極する論として氏の「額田王の春秋競憐歌」(『万葉歌人と作品　第一巻』一九九九年、和泉書院)および「額田王の心情表現—『秋山我れは』をめぐって—」(『文林』20、昭60・12)の論文があることをご教示いただいた。「犬養が女性的な情感を重んじ、秋への軍配が論理的必然のないことを強調したのに対して、うたいはじめから秋へと帰着する間、論理性をもってよみ進められていることを歌の構成及び語句から提示するもの」(右論文の「額田王の春秋競憐歌」)という新見を改めて読み返し、この歌の論理性については納得するものがあった。しかし、なお、万葉に記載されたこの歌から、額田自身の内にもつ論理性を析出することとは別に、この歌が聴衆を相手にした口誦の場において、額田に秋の判定に導いてゆく「ゆれ動く」心情表現としての演出上のポーズや創意工夫のあったことも無視できないのではないかと思う。拙稿は、犬養の心情表現論とは異なる女歌的、ジェンダー的意味合いの要素が、作品の背後にうかがえることを、小論全体の構想上、むしろ重視したかたちをとった次第である。

(6) 「ますらを」の表意文字は、官僚貴族を思わせる「大夫」の表記の他に、原義の剛強を意味する「健男」「建男」とある表記が二例(一三七六・一三八六)あり、それが人麻呂歌集歌(略体歌)である点も注目される。

(7) 以前、拙稿「男性による女歌—万葉集における—」(『萬葉』第百六十八号、平成十一年三月)において、男性歌人が女の立場で詠んでいるものとして、人麻呂、赤人、金村らの作を取上げたが、この項では、男性が女性をどのように見、とらえて詠んでいるかという視点から、扱っていることを、念のため付言しておく。

付記　拙稿は第五十九回萬葉学会全国大会（平成十八年十月二十八日、於日本女子大学）における講演内容に基づいたものである。学会の直後、交通事故に遭い骨折し、以来体調を崩したため、原稿化がたいそう遅延してしまった。講演の折、時間上省略した箇所を補うにとどめ、ほぼそのままであることも、おことわりする次第である。

（あおき　たかこ・日本女子大学名誉教授）

続紀宣命のケリと来

栗田　岳

一　はじめに

『続日本紀』所収の宣命（続紀宣命と称する）において、ケリ及びその諸活用形（以下、ケリで総称していちいち断らない。また、後述するように、ケリ語形には「助動詞」「補助動詞」の双方が想定されるが、ひとまずその別は措く）は、どのように記載されているのか。明らかにそうであるものとしては、音仮名表記の例が挙げられよう。続紀宣命における総数は二一。次にその例を引くが、小字に関しては、点を付してそうであることを示した。[1]

a　また吉備朝臣は朕が太子と坐しし時より、師として教へ悟し家流多の年歴ぬ。今は身も敢へずあるらむものを、夜昼退らずして護り助け仕へ奉るを見れば、かたじけなみなも念ほす。（四一詔）

一方で、訓字「来」に音仮名を送ったものがある。用例数は十一。

b　去年の九月、天地の貺へる大き瑞物顕れ来理。（五詔）

従来、そう見なされてきたとおり、これもケリの例であろう。では、次のcはどうだろうか。

c　又大伴佐伯宿禰は、常も云ふ如く、天皇が朝守り仕へ奉る事顧みなき人等にあれば、汝たちの祖どもの云ひ来久、（中略）と云ひ来流人等となも聞こし召す。（十三詔）

cに見られる、「来久」「来流」は、「けらく」「ける」と訓みうる一方で、動詞「来」（以下、紛らわしいので、動詞「来」をクルと記すことにする）として、つまり「くらく」「くる」と訓む可能性も妨げない。付言すれば、続紀宣命において、クルの確例、及びクルとも見なしうる例は、すべて動詞連用形を承けている。いわゆる補助動詞としての用法であって、外形的に助動詞と区別のつきにくい場所にのみ現れているのであった。

これらb・cとは異なり、「来」字に仮名を送らぬ例が見出される（総数は十四）。

d　聖の君と坐して賢き臣供へ奉り、天下平らけく、百官安くし

てし、天地の大瑞は顕れ来となも、　（六詔）

この類は、そのまま「く」と訓ぜられることもあるものの、よく知られるとおり、時に「けり」と訓まれもする。

このように、ケリの表記をめぐっては、「音仮名のみ」、「訓字と音仮名の併用」、「訓字のみ」という三つのパターンが確認された。このうち、「訓音併用」のものは、先のbのように「り」と送る例を除けば（そして、そう送るのは、この一例だけなのだが）、ケリではなくて、クルの例なのかもしれず、また「訓字のみ」の例においてケリ・クルの弁別は、まったく解釈によるほかない。さらに、このクルについては、一例ながら完全に音仮名表記される例がある。[2]

e　かくして、今の帝と立ててすまひ久流間に、うやうやしく相従ふ事は無くして、とひとの仇のあることのごとく、言ふまじき辞も言ひぬ、為まじき行も為ぬ。　（二七詔）

まとめておこう。

1　音仮名のみ　↓　ケリ・クルの確例

2a　訓字「来」＋音仮名　↓　ケリもしくはクル

2b　訓字「来」のみ　↓　ケリもしくはクル

1のように音仮名表記される場合と、2a・bのように訓字を用いる場合の差異。及び、訓字を用いるものの中でも、仮名を送る・送らないという2aと2bの差異。これらは、何らかの基準に基づく有意の現象なのか。また、2a・bの各例は、これまでの訓読に確たる根拠があるわけでもないようだが、本来、ケリ・クルのいずれとするのが適当か。本稿では、それらの考察を行うが、加えて、ケリという語形の品詞の問題にも触れておきたい。即ち、ケリという語形には、助動詞とされるものの他に、クルにアリの承接した補助動詞の例が想定される。たとえば、次に引くfは萬葉歌であり、かつ補助動詞ではないが、クル＋アリによってケリが生じた、その具体例である。

f　……見まく欲り思ふ間に玉梓の使ひの家礼ば嬉しみと……　（巻十七・三九五七）

むろん、補助動詞ケリを助動詞ケリの起源とする論があって、それに立てば、両者は一つのものとされるであろう。が、そうであれ、補助動詞・助動詞のどちらかとして言語化された個々の例も当然あるわけだ。その差異は続紀宣命の表記に反映しているのであろうか。この点に関説する。

二　訓字「来」の使用状況

まず、訓字「来」の使用状況について考える。本稿の見るところ、続紀宣命において「来」字が用いられるのは、補助動詞とし

て解釈される例（即ち、クル及び、それにアリの承接したケリ）ばかりであるが、補助動詞のクル・ケリすべてに「来」字が用いられるわけではない。音仮名のみで記される場合と訓字「来」を用いる場合。両者の間には、どのような違いが認められるのであろうか。[3] この点について本稿は、クル・ケリの表す意味の小異に応じて検討を進めるのがよいと考える。

クル・ケリは、他の場所から言語主体のもとに現れる動作を指すのが、その基本であろう。補助動詞として用いられた場合でも、上接動詞の動作と相俟って現れたというだけで、同様かと思われる。そうした空間的な内容の例は、いかにも訓字「来」の意義に適いそうであり、事実、「来」字によって記載されている。

g　軍を敗り糧を費やして還り参ゐ来つ。（六二詔）

h　卿等の問ひ来む政をば、かくや答へ賜はむ、かくや答へ賜はむと白し賜ひ、（六詔）

gでは、陸奥平定の軍が破れて都に戻ったこと、hでは、諸臣が政務の件で伺いを立てにくることを述べる。見られるように、両者は、都に帰還・近傍を訪問と、空間の範囲や具体的な様態は異なるが、いずれも言語主体・天皇のもとに現れる動作を指すと考えられる（挙例は省略に従うが、五一詔にも例がある）。これらに加えて、前節b・dは、その展開的な例であろう。共に日本に瑞兆の出現したことが述べられる。この類は、別の場所を起点とするわけでも、そこからの移動があったわけでもない点、g・hなどとは一線を画するが、言語主体たる天皇のいる地・日本への出現を表す点では、それら空間的な例の延長線上に把握されるであろう。以上、続紀宣命のクル・ケリのうち、空間的意味の例とその延長線上にある例では、そのすべてに訓字「来」が充てられていることを確認した。

一方、クル・ケリには、時間的意味の例があることもよく知られている。補助動詞であれば、上接動詞が表す動作の推移が、ある時点に発して、言語主体が身を置く時間に至ったことを述べるものである。続紀宣命にもその例を見ることができるのだが、まず、その構文的環境に注意しておく。

＊　訓字「来」使用例の分布[4]

1　時間的意味、連体　十四例
2　時間的意味、非連体　三例
3　非時間的意味、連体　三例
4　非時間的意味、非連体　五例

表は、訓字「来」の使用例を、まず意味の上から時間的か否かに区分し、さらに、出現する構文的環境によって連体法か否かに区

分したものである。時間的意味の「来」字が、連体法に現れやすいという傾向が窺えるであろう。時間・非時間を問わぬ連体法の総数は1、3より十七であるが、うち時間的意味の占める割合は八二％に上る。また、時間的意味の内部で見ても、その総数が1、2より十七。連体法に現れる例の比率は八二％となるのである。これを見る限り、時間的意味において、「来」字と連体法との間には親和性があると言えそうである。そこで、同様の調査を訓字「来」を用いぬ、音仮名のみの例に対しても行うことにする。

＊　音仮名表記例の分布(5)

1′　時間的意味、連体　三例
2′　時間的意味、非連体　一例
3′　非時間的意味、連体　一例
4′　非時間的意味、非連体　十七例

1′、3′より、連体法総数に占める時間的意味の割合は七五％。また、1′、2′より、時間的意味の総数における連体法出現例の割合も七五％である。「来」字を用いる場合に比して、若干比率は低めであるが、それでも八二％と七五％。四捨五入すれば共に八割である。有意差があるとは言えないであろう。即ち、時間的意味のクル・ケリ自体が連体法に出現しやすいのであり、そのために、「来」字を用いる用いないに関わらず、連体法の比率が高くなるのである。本節の目的に沿って換言すれば、連体法への出現は、訓字「来」の選択には関わらないということだ。思うに、時間的意味のクル・ケリは、過去のある時点からの継続を述べるものである。「来歴」を語ると言ってもよい。そして来歴とは、一定期間継続して（もしくは恒常的に）認められるものなのだから、ある物の「属性」的にも把握されうるであろう。たとえば、ある同窓会が「これまで毎年九月に開かれてきた」とする。その来歴は、「〜年に〜高校卒」などと並んで、その同窓会の属性規定ともなりえよう。こうして、来歴が属性規定に馴染むために、来歴を表す時間的意味のクル・ケリは、体言の属性規定を行う連体法に現れやすいのである。さらに、より一般的には次のようにも言うことができるであろう。即ち、連体法が体言の属性を規定する場所であるために、それに伴って連体法述語も状態性の意味を持つことが多い。そして、時間的意味のクル・ケリが表す来歴、つまり過去からの継続には、その継続ということからして、状態的とも言いうるような一面がある。この点からも、時間的意味のクル・ケリは、連体法と縁が深くなるかと思われるのだ。

以上、時間的意味に現れる「来」字の構文的環境を眺めたが、連体法に傾向することと、訓字「来」を用いて表記することとは、

直接の関わりを持たないようだった。ゆえに、今度は、表されている事態内容に目を転じることにしよう。そして、「来」字は、たしかにある特定の内容の例にのみ現れるようなのである。

i　遠皇祖の御世を始めて、天皇が御世御世聞し看し来食國天つ日継高御座の業となも、神ながら念ほしめさくと、（十四詔）

j　高天原ゆ天降り坐しし天皇が御世を始めて中今に至るまでに、天皇が御世御世天つ日嗣と高御座に坐して治め賜ひ恵び賜ひ来流食國天下の業となも、神ながらも念ほしめさくと宣りたまふ大命を、衆聞し食さへと宣る。かく治め賜ひ恵び賜ひ来流天つ日嗣の業と、今皇朕が御世に当たりて坐せば、（十三詔）

iとjは、いずれも、代々の天皇によって日本の統治が受け継がれてきたことの正当性を述べる。こうした表現に現れるのが、時間的な「来」字使用の一つである（三、四、五、十九、二三の各詔にも例がある）。他方、kやlの如き例も見られる。

k　又、大伴佐伯宿禰等は、遠天皇の御世より、内の兵と為て仕へ奉り来、又大伴宿禰等は吾が族にもあり。（十七詔）

l　藤原の卿等をば、掛けまくも畏き聖の天皇が御世を重ねておもしき人の門よりは、慈び賜ひ上げ賜ひ来流家なり。今又過ちなく仕へ奉る人をば、慈しび賜ひ治め賜ひ忘れ賜はじと、（二五詔）

大伴氏・藤原氏といった氏族が、代々天皇に仕え、用いられてきた紐帯を確認する際に「来」字が現れる。先掲cも同様。引用の中略部には、「王のへにこそ死なめ」といった文言が入るのである（他の例としては五二、五七の各詔）。これが、「来」字使用の類型のもう一つということになるのだが、実はこれらも先の天皇の統治の例と一括されよう。つまり、氏族の臣従とは天皇による統治の裏返し、いわば後者は前者のヴァリアントである。したがって、時間的意味の「来」字は、代々の天皇が日本の統治を継承してきた流れ、有力氏族がそれに服属してきた流れのそれぞれを、正当なものとして確認する文脈にのみ現れると言える。[6] 以下、こうした訓字「来」の充てられる時間の流れを「統治・服属の継承」と呼ぶ。

これを、時代の別に応じていま少し細かく観察しよう。その際、称徳期宣命（但し、淳仁期のものでも孝謙上皇＝称徳天皇による宣命はこれに含める）を時代区分の基準とした。よく知られるとおり、称徳期宣命には、時に他の時期には見られぬ独特の性格が窺われる。その点を考慮したのである。

まず、称徳期より前。この期間の宣命では、時間的意味のクル・ケリすべてが、統治・服属の継承を表す。資料の性格を考えれば、この手の内容が多くなるのはありそうなことである。が、

そうである以上、統治・服属の継承の例にのみ「来」字が用いられていても、それは単なる結果論、時間的意味すべてに「来」字を用いただけという可能性が否定できない。

次いで称徳期は、統治・服属の継承の例を見ず、それ以外の時間的なクル・ケリが現れる。前掲aとeの二つがそれに当たるであろう。aは、吉備真備が長年、称徳天皇を教導してきたとするもの。一方のeは、淳仁天皇が孝謙上皇に対して非礼であったという内容である。見られるとおり、これらには音仮名が用いられているわけだ。そして、これについては、二つの考え方が成り立つかと思われる。既に指摘のあることだが(文献十、十三など)、称徳期は、他の時期に比して音仮名の使用率が高い。これらa・eの音仮名表記もそれを反映するというのが、その一つである。一方で、称徳期宣命には、訓字使用を天皇に関わる文脈に限って、他は音仮名で表記するという用字法も認められるようだ。たとえば、文献二は、称徳期宣命を調査して、「賜」「奉」字について、次に引く指摘をした。

・臣下に対する尊敬表現には「賜」を積極的に用いず、タブと仮名表記する。

・天皇に対するマツルには「奉」。天皇自身が謙譲表現を用いねばならない場合には「奉」を用いず、仮名表記をするように見受けられる。

いずれも、訓字使用を天皇が尊敬される例に限定して、他と区別しようとする用字法である。本稿が扱う時間的意味の「来」字は、むろん敬語表現ではないけれど、これらに通底する現象とは言えないだろうか。続紀宣命は、i・jのように、日本の統治は代々の天皇が受け継いできた、と繰り返し主張する。統治・服属の継承とは、続紀宣命に叙される時間の推移の中では、特権的なものなのであろう。そうした意識の下、称徳期より前には統治・服属の継承に限って用いられてきた(結果論の可能性はあるにせよ)訓字「来」を、他の時間の推移には充てず、それによって、特権的な統治・服属の継承を、表記の上からも他と区別したのではないか。翻って、先の敬語の用字法も、天皇を尊敬する表現に訓字使用を限定して、天皇の特権性を際立たせたものと言える。その意味で、天皇の統治の正当性を述べる文脈において、用字によっても差別化を行う「来」字の場合に通うと思われるのだ。これが、先に二つと述べた考え方のもう一つである。そして、音仮名の使用率が高いこと、訓字の使用を天皇に関わる文脈に限定すること、という二つの考え方のいずれに立つにしても、それらが称徳期宣命に見出される特性を反映していることに注意すべきであろう。既述の如く、称徳期宣命には、他の時期の宣命と異なる性格が散見さ

れる。本稿の扱う「来」字にも、その一環としうるような側面が見出されたわけだ。

最後に称徳期より後の期間では、時間的意味の例に「来」字と音仮名が併用されている。「来」字を用いたものにはmがある。

m　みまし大臣の仕へ奉り来状は、今のみにあらず、掛けまくも畏き近江大津宮に御宇しめしし天皇が御世には、大臣の曾祖藤原朝臣内大臣、明き浄き心を以ちて、天皇が朝を助け奉り仕へ奉りき。　（五二詔）

ここでは特定の個人（藤原永手）が、天皇に仕えてきたことを述べており、統治・服属の継承の例とは言えないようでもあるが、その反面、永手の忠勤は、その先祖に発する忠勤の系譜に属するものともされている。よって、これも統治・服属の継承の例と見てよいであろう。一方、それ以外の時間的な例は次のnである。

n　本より朝の使其の國に遣はし、其の國より進し渡し祁里。此に依りて使の次と遣はすものぞ。　（五六詔）

唐との往来が古くから続くものであるとし、ケリには音仮名が充てられている。このように、称徳期より後の例でも、時間的意味の「来」字は、統治・服属の継承に限って用いられ、他は音仮名表記になると言える。しかし、その例は、わずかにm・nの一つずつ。何とも言い難いものがある。

見てきたとおり、時間的意味において、訓字「来」は、統治・服属の継承を表す場合にのみ用いられ、そのことに例外はない。とりわけ称徳期においては、訓字使用を天皇に限る現象が他にも指摘されており、この「来」字の場合も、統治・服属の継承を他から区別するための限定と考えることができるかと思われる。しかし、その称徳期にしても、他の時期に比して音仮名の使用率が高いという指摘も別にあったわけで、それが原因であるのかもしれなかった。さらに、称徳期前後の時期は、用例の分布や数の点から速断が慎まれるような状況にあった。この点について、現時点で論じられることは以上であろう。本稿は、時間的意味の「来」字に関し、統治・服属の継承が、その使用基準になっているという可能性を提示するものである。

三　送り仮名の有無を分かつもの

既述の如く、訓字「来」が用いられるのは、すべて補助動詞の例である。そのうち、仮名を送るものには、bというケリの確例が一つあったが（「理」字が送られている）、その他はケリともクルともつかない。また仮名を送らぬものはそもそも判別しがたい。そして、これまでの訓読も、何となく「けり」なり「くる」なりと訓むものであって、場当たり的と言えなくもなかった。では、

何か明らかな根拠に基く訓読は可能なのであろうか。本節ではそのことを考える。

具体的な検討に移るにあたり、時間的意味を表す次の四例を引く。その際、「今」或いは「中今」という語に注意したい。

o　かく治め賜ひ慈しび賜ひ来留天つ日継の業と、今皇朕が御世に当たりて坐せば、　（四詔）

j　高天原ゆ天降り坐しし天皇が御世を始めて中今に至るまでに、天皇が御世御世天つ日嗣と高御座に坐して治め賜ひ恵び賜ひ来流食國天下の業となも、神ながらも念ほしめさくと宣りたまふ大命を、衆聞し食さへと宣る。かく治め賜ひ恵び賜ひ来流天つ日嗣の業と、今皇朕が御世に当たりて坐せば、　（十三詔　再掲）

p　天皇が御世御世聞し看し来天つ日嗣高御座の業となも、神ながら念ほしめさくと宣りたまふ天皇が勅を、衆聞し食さへと宣る。かく聞し看し来天つ日嗣高御座の業は、天に坐す神地に坐す祇の相うづなひ奉り相扶け奉る事によりてし、　（二三詔）

i　遠皇祖の御世を始めて、天皇が御世御世聞し看し来食國天つ日継高御座の業となも、神ながら念ほしめさくと、　（十四詔　再掲）

o・jが「来」字と仮名、p・iが「来」字単独の例である。まず、「来」字と仮名の場合であるが、oに一つ、jには二つの例を見る。そのうち、oの例とjの二つ目の例は、まったく同じもの。受け継がれてきた皇位に、現在、自身があることを述べる文である。そして、その「現在」が「今」という語によって表されているのは見られるとおりであろう。また、jの一つ目の例では、皇祖以来現在に至るまでと、代々の皇位継承の着点たる「中今」が明記されている。即ち、「来」字と仮名の例は、「今」乃至「中今」（以後、「今」で総称させる）によって、過去からの継続が現在に至ることを明示する文脈に現れるのである。一方で、「来」字単独の例であるpとi（pに二つ、iには一つの「来」字がある）は、代々、皇位が受け継がれてきたことに言及する点ではo・jと共通する。しかし、これらp・iの場合、o・jと異なって「今」と共に現れてはいない。たとえば、iとpの一つ目の例では、代々「聞し看」してきた経緯を述べるのみで、その流れの着点たる現在には言及しない。また、pの二つ目の例は、代々の皇位継承が神慮によるものであるという一般論に続き、先のoなどのようには、今、自身がその地位にあることを述べないのであった。Aとしてまとめておこう。

A　「来」字と仮名の例は、「今」によって「現在」であることを明示する文脈に現れる。

「来」字単独の例は、一般論的内容で「現在」性も明示され

ない文脈に現れる。

この現象は、後で触れる幾つかの例を措けば、時間的な「来」字全体において確認される。「今」が現在であることを表す文脈に「来」字と仮名の例が現れるのは、他に先に引いたl、及び二五詔。一方、「今」の語もなく、現在性の明示というよりも一般論的な内容に単独の「来」字が現れるものとしては、先掲のmと三詔に例を見る。(7)

次に、時間的意味以外の例を観察しよう。再掲であるがbとdを引く。bが「来」字と仮名、dが「来」字単独の例である。

b　去年の九月、天地の　貺へる大き瑞物顕れ来理。　（五詔）

d　聖の君と坐して賢き臣供へ奉り、天下平らけく、百官安くしてし、天地の大瑞は顕れ来となも、　（六詔）

両者は瑞兆の出現を言う点で共通するが、文脈が異なっていよう。bは、「去年の九月」という具体的な時間に、実際、瑞兆が現れたことの記述である。一方のdでは、聖代において瑞兆が現れるとの一般論が述べられる。つまりbからは、dに比して、より具体的・現実的な性格が看取されるであろう。そして、そのようなbは、一般論のdが「来」字のみなのに対して、仮名を送る例であった。以上をまとめて、Bとする。

B　「来」字と仮名の例は、瑞兆が現実に出現した文脈に現れる。

「来」字単独の例は、瑞兆の出現を一般論的に語る文脈に現れる。

これを先のAと合わせれば、次のCのようになろう。

C　「来」字と仮名の例は、現在性・現実性が明示される文脈に現れる。

「来」字単独の例は、一般論的文脈に現れる。

この現象をどのように理解すべきか。まず、文献十一の議論を確認する。文献十一は、完全な存在詞述語ではなくて、それが動詞に承接したものであっても、やはり、そこには「存在表出性格」が認められるとする。たとえば「クジラは海に棲む」と「クジラは海に棲んでいる」では、後者に「より現実的な印象」があると述べていて、これはいかにもそのとおりであると思う。このことはまた、同じ文献十一に指摘される、「ある」が他の動詞とは異なり、「あった」との対立において積極的にテンス的「現在」を示すことにも通じていよう。即ち、存在詞の承接によってもたらされるものとは、現在性・現実性の表出である。そして、このことが重要かと思われるのである。本節の考察対象である補助動詞のケリ・クルを分かつものとは、当然のことながら、存在詞アリ承接の有無であった。そして、アリの承接によって現在性・現実性の表出がもたらされると考えられる以上、現在性・現実性は

クルではなくて、ケリの方にこそ観察されてよい。ここで先のCに戻ることになる。「今」や「去年の九月」などによって、現在性・現実性が明示される際に現れるのは、「来」字と仮名の例であった。したがって、「来」字と仮名の例も、現在性・現実性という文脈に適うケリの例であると考えられよう。一方で、「来」字単独の例は、特に現在性・現実性が示されぬ一般論的な文脈に現れていたが、こちらは、存在詞を承接させぬクルであると言える。存在詞を承接させて、現在性・現実性を表出するケリとの関係性の中で、クルは一般論的内容の方に分属していくのである。たしかに、先に引いた「クジラは海に棲む」の場合でも、「クジラは海に棲んでいる」がより現実的であったのに対し、一般論的な性格が窺えたわけだ。

このように考えて本稿は、「来」字に仮名を送る例をケリ、「来」字単独の例をクルとするのであるが、このことが、続紀宣命全体に亘って妥当であることを、例を引いて確認しておきたい。

q　うつくしも皇朕が御世に當りて顕はるる物にはあらじ。今嗣ぎまさむ御世の名を記して、応へ来、顕れ来留物にあるらしと念ほし坐して、今神亀の二字を御世の年名と定めて、　（五詔）

b同様、五詔の例で、「去年の九月」に実際に現れた瑞兆についての言及である。ここでは「応へ来、顕れ来留」とあって、連続する二つの「来」字のうち、二つ目にのみが仮名が送られる。同じ瑞兆の出現を言うにも関わらず、仮名の有無が食い違っているのである。が、これは、並列する「応へ」「顕れ」の両者に対してアリが関わっているのではないか。たとえば現代語で「最近は、午前中勉強して、午後アルバイトに行っています」という時。この文は、結局「勉強している」「行っている」と、並列される述語の両方にシテイルが関わるのであろう。このqも同様であると考える。実質的には「応へケリ」「顕れケリ」なのであって、「去年の九月」という現実に現れた瑞兆を言うに相応しく、共にアリが承接するのである。次いで、時間的意味の例に関する補足。

r　朕に宣りたまひしく、大臣の御世重ねて明き浄き心を以て仕へ奉る事に依りてなも、天日嗣は平けく安く聞こしめし来流、此の辞忘れ給ふな棄て給ふなと宣りたまひし大命を、受け賜はり恐まり、汝たちを恵び賜ひ治め賜はくと宣りたまふ大命を、衆聞し食さへと宣る。　（十三詔）

s　遠天皇の御世御世、年の緒落ちず間む事無く、仕へ奉り来流業となも念ほしめす。又天津日嗣受け賜はれる事をさへ歓び奉出せれば、辱しみ歓ばしみなも聞こしめす。　（五七詔）

いずれも、「来」字に仮名の例であるが、「今」などの語とは共起していない。しかしrは「大臣の忠勤によって、代々の統治がう

まくいってきたこと」を確認し、それを忘れぬよう求めるものである。また、現在の統治もそのことをふまえてなされている旨、述べられており、過去からの継続によって現在が規定されていることを明示する。換言すれば、「今」などの語がないという現象はそれとして、内容的にはその語があって自然な文脈を持つのである。一方のｓでは、長年欠かさず続いてきた渤海からの使節が、天皇即位に際してまた来朝したことを歓迎するもの。現在を過去からの継続の系譜に位置づける発言であり、実際に言語化はされていないものの、「今」の類があってもよいような文脈と言える。このように、ｒとｓには、「今」という語こそないけれど、文の意味するところからは現在性が表出されていた。同じく「今」などと共起しない、「来」字単独の例（ｐなどを参照）が、あくまで一般論的内容を述べていたことを考えると、やはりｒとｓは、存在詞を含むケリと見てよいであろう。しかしながら、ここに一つ解消しておかなければならない問題があった。

ｔ　高天原より天降り坐しし天皇が御世を始めて、中今に至るまでに、天皇が御世御世天つ日嗣と高御座に坐して、治め賜ひ慈び賜ひ来食國天下の業となも、神ながら念めしめさくと詔りたまふ命を、衆聞こしめさへと宣る。かく治め賜ひ慈び賜ひ来留天つ日嗣の業と、今皇朕が御世に当たりて坐せば、（四詔）

同種の表現が反復的にあって、先のｊ・ｐと同じ類型に属する（なお、先のｏは、このｔの一部である）。しかし、ｊ・ｐと異なり、表現が繰り返される際に、送り仮名の有無が変わっている点に注意したい。つまり、一度目が「来」字のみなのに対し、二度目には仮名を送るのだ。そして、一度目（「来」字単独、即ち本稿によればクルとされる）における時の表現を見れば、そこに「今」の語が認められる。「来」字と仮名の例をケリと考えるにあたり、「今」による現在性の明示に注意した本稿にとって、これはいささか不都合と言えそうである。しかし、次に引く例を考慮してみた場合はどうであろうか。

ｕ　遠皇祖の御世を始めて、中今に至るまで、天つ日嗣と高御座に坐して、此の食國天下の業を撫で賜ひ慈び賜はく、時時状状に従ひて、治め賜ひ慈び賜ひ来業と神ながら念しめす。（五詔）

ｖ　神代より言ひ伝て久良久そらみつ大和の国は皇神の厳しき國言霊の幸はふ國と語り継ぎ言ひ継がひ計理……（巻五・八九四）

ｕはｔなどの類型。ｖは萬葉歌であって多少、趣を異にするが、「言い継ぐ」の類を繰り返して言語化する、その反復性においてｔなどに通う。ここで注目されるのは、ｕ・ｖ各例の繰り返し部分である。まずｕでは、「撫で賜ひ慈び賜はく」とあり、その後「治め賜ひ慈び賜ひ来業」と受ける。一度目は、「来」字に関わる

要素を伴わず、二度目に仮名を送らぬ「来」字が現れるわけだ（なお、三詔にも同様の例がある）。一方のｖは、一度目が「言ひ伝てくらく」、二度目が「言ひ継がひけり」で、クルのク語法の後はケリとなる。つまり、これらｕ・ｖでは、同種の表現が繰り返されることにおいて、前後の述語に時間情報の異なりがあるのだ。これを模型化して述べてみよう。イ「する」、ロ「してくる」、ハ「してきている」。イに対してロには、過去からの継続の意味が加えられ、ロに対してハは、その継続が現在に至ることを明示する。ｕをこの模型になぞらえれば、一度目はイ、二度目がロ。ｖはさらに一段階ずれて、ロ、ハの順となる。いずれも、繰り返される際、述語の時間的情報は、前のそれに比して細かくなっている。続紀宣命やその周辺の文章には、近接して表現が反復される例を見るけれど[8]、その場合、後の述語において、情報（この場合、時間に関する）が細密になるということも、まま見られるようなのである。それをふまえて、再度ｔを検討したい。既述の如く、ｔにおいては、一度目が「来」字単独で、二度目に仮名を送る。本稿は、「来」字単独ならクル、送り仮名があればケリと見ようとしており、ｔもそのとおりにしてみると、先の模型で言うところの、ロ、ハの順、反復後の述語に時間の情報が細密となるｕ・ｖの類例ということになるのである。つまり、先に見た「今」などとの関係においては、むしろケリとされそうなｔの「来」字も、この観点、反復後の述語からは、クルと見ることの根拠を得る。或いはこうも言えよう。上代の文章に、繰り返されることにおいて、述語の情報がより細かくなるという一つの型がある。その型に保証されて、ｔの「来」字は、「今」と共起していたとしても、クルと考えることができるのである。なお、第一節に引くｃの「来久」と「来流」も同じように考えられるだろう。送り仮名を持たぬ（むろんク語法に関しては送っているが、問題としてきた意味ではそうなのである）一度目の「来久」を「くらく」、対して二度目の「来流」は「ける」と訓むことになる。

以上、続紀宣命の「来」字において、その送り仮名の有無が、ケリ・クルというアリ承接の有無に対応すると考えた。しかし、こうした送り仮名の有無には、ケリ・クルの差異を表示する目的などないと見る向きもあろう。たとえば、続紀宣命には、よく似た文章が散見され、それらは、起草にあたって先行の宣命を参照したための類似であるとされる。「来」字の場合も、参照例にたまたま送り仮名がある（もしくは、ない）ことに倣ったに過ぎぬという想定が、或いはなされるかもしれない。しかし、当然のことながら、「来」字は、参照が取り沙汰されるような、類似の文章にのみ現れるものではない。また、類似の文章に確認される際も、

むしろ表記を変更している例が見出されるのだ。再び、用例j（十三詔）とt（四詔）を見ることにしよう。この二例はきわめてよく似ており、文献二は、これを引いて十三詔が四詔を参照したものであるとする。ここで、jの一つ目の「来」字に注意したい。「来流」と仮名が送られている。一方、それに対応するtの一つ目の「来」字はどうであるか。仮名が送られていないのは見られるとおりであろう。つまり、十三詔の当該箇所は、全体として四詔を参照したものかもしれないけれど、「来」字に関しては、そのままそれを受け継いではいないのである。たしかに、参照が云々される類似した文章の間に、この程度の微差が生じるのは他にも例を見、十三詔の言語化の際に、たまたま仮名を送ってみたにすぎぬ可能性もあろう。しかしそれは、可能性があるために否定こそされないものの、結局、検証が不能であるようなことに属する。これらをふまえると、「来」字と送り仮名の問題は、先行宣命の参照といったことで説明がつくわけでもない。一度は言語という具体的な現象に即して考察されるべきかと思われる。そして、これまでの観察に基づくならば、送り仮名の有無は、アリ承接の有無に対応すると考えられるのである。

四　音仮名表記

前節までに、続紀宣命における訓字「来」使用の様相を見てきたが、「書き分け」に関して述べるべきことはそれに尽きている。時間的意味で統治・服属の継承とは関わらないクル・ケリ、及び、助動詞のケリは、それぞれ音仮名表記されるからである。しかし、単に音仮名で記されるものにも関説すべきことがあるようだ。既述の如く、ケリという語形は、品詞として二つの可能性がある。クルにアリが承接した補助動詞ケリ、及び、助動詞ケリである。そしてこのことは、ただちに助動詞ケリの起源論へと結びつく。つまり、この起源論にも大きく二つの解釈、クルに由来するという説と、助動詞キに由来するという説があるのだった。本稿の扱う続紀宣命の表記は、この助動詞ケリの起源という問題にも関連していくかと思われる。

文献八は、続紀宣命で訓字「来」が用いられるのは、補助動詞のクル・ケリであって、助動詞のケリは、音仮名表記によってそれらと区別されているとする。助動詞ケリの起源を助動詞キと見る立場から、クルとの無縁性が、表記の違いにも現れていると考えるのである。が、ここでまず疑問に思うのは、助動詞キが助動詞ケリの起源になるとは、いったいどのような現象なのかという

点であろう。むろんアリが承接したとされるのだが、我々の知る日本語の構文上、助動詞キを持つ述語にアリが承接するとは、なかなか考えにくいことである。もっとも、この点を考慮して、たとえば文献七は「キで終止しているテンスを持った文全体をアリが統括するようになった」とする。しかし、そう言及された内容それ自身が、どのような現象を指すのか判然としないようだ。また、そう考えるにしても、なぜ他の助動詞で終止する文ではアリが「統括するように」ならないのかという問題も生じるであろう。キ＋アリを起源とする論には、それを裏打ちする言語事実が想定しにくいという難点が残るのである。

では、続紀宣命の書き分けに戻った場合。たしかに、文献八の言うとおり、訓字「来」の使用は、補助動詞クル及び補助動詞ケリに限られていた。しかし、単純に「補助動詞＝訓字表記」とするばかりでは済まないことも、これまでの議論で明らかであろう。たとえば、例eの「久流」は補助動詞クルの確例だが、音仮名で記されていたのである。補助動詞のクル・ケリは訓字「来」で、とするのであれば、eの如き例の説明がつかないであろう。なお、このeについて一つ補足する。文献八は、eに大字が用いられていることに関して、「これが助動詞的意味ではないと考えられていたことを示すもの」と述べている。文献四が「字音仮名については、自立語は大字表記、附属語は小字表記」と指摘するように、音仮名表記される助動詞は小字なのであろうが、補助動詞に大字を用いてそれと区別するという現象が認められるのか。たとえば、先の文献四も、「附属語的な動詞」「複合動詞の後項」に原則の例外となるものがあると述べている。たしかに、eと同じ称徳期の宣命の中にも、補助動詞(w)や複合動詞後項(x)が小字の音仮名で書かれた例を見るのである。

w　貞しく明かに浄き心を以て、朕が子天皇に侍へ奉り、護り助け麻都禮。　（四五詔）

x　かにかくにと念ひ佐末多久事なくして、教へ賜ひのまにまに侍へ奉れと、　（三一詔）

これらをふまえると、eに大字を用いることは、一概に、その助動詞でないことの表示に結びつくものではないと考えられる。

さらに、助動詞ケリと補助動詞ケリの無縁性を、続紀宣命の表記にも見る論では、用例の理解に問題が生じてくるようだ。音仮名表記されるケリ語形を、すべて助動詞ケリと見るために、時として文脈上の不調和がもたらされるのである。たとえば用例a（再掲）。

a　また吉備朝臣は朕が太子と坐しし時より、師として教へ悟し家流多の年歴ぬ。今は身も敢へずあるらむものを、夜昼退らず

して護り助け仕へ奉るを見れば、かたじけなみなも念ほす。　（四一詔）

文献八は、このケリが「現在と断絶した過去の出来事」を表す助動詞の例であるとする。引用中の「師」（吉備真備を指す）が「みふみよみ」と訓ぜられていることから、これを「講読の師」とし、真備の教育は「皇太子時代には続けられたものであろうが、五十歳になろうという称徳天皇の現在の年齢に至るまで続けられたとは考えにくい」と述べるのである。しかし、そうした想定を持ち込まずに、実際の言語を見れば、「太子と坐しし時より教え悟し家流」とあるのだから、皇太子時代は「教へ悟す」ことの「起点」と考えるべきである。また、この句は全体として「多の年」にかかっていくわけで、よって「教へ悟し」が、長年にわたって継続したものであることも明らかであろう。そして、その長い年月が経った今、真備は老体にも関わらず、天皇に近侍して仕える。この四一詔は、その長年の功績に報いて、真備を右大臣に任じようとするものなのだから、やはりその「師」とは単なる若年時の「講読の師」ではあるまい。真備は、漢籍の読み方を教えるに止まらず、そのことを通して薫育を行い、長じた後も助言を行ってきたのであろう。以上をふまえると、「教へ悟す」に承接するこのケリは、「現在と断絶した過去の出来事」を表すものではなくて、皇太子時代から今に至るまでの時間の継続を表すもの、つまり、補助動詞の例ととるのが妥当かと思われる。[9]

このように、続紀宣命で音仮名表記されるケリ語形には、補助動詞ケリと考えられる例がたしかに存在するのだが、一方で、いかにも助動詞ケリ的な、次の如き例も見出される。

y　此を見るに仲麻呂が心の逆に悪き状は知りぬ。然れば先にしが奏しし事は、事毎に奸み諂ひてあり家利　（二八詔）

現状に照らせば、かつて藤原仲麻呂の述べた内容は諂いであることがわかったという例で、助動詞ケリのいわゆる「気づき」の解釈によく馴染むようである。即ち、続紀宣命においては、補助動詞ケリと助動詞ケリが、区別なく音仮名で記されていることになる。そして、これには二つの解釈が可能であろう。まったく無縁のものであれ、音形態が同じなら同じ音仮名表記になる他ないという場合。もう一つは、同じように表記される両者を、意味的にも同質視していたという場合。しかし、この点については、今の段階でどちらと決せられるようなものでもあるまい。結局は助動詞ケリの起源論だからである。ただ、ここで文献十二の議論が参考になるのではないかと思う。

文献十二は、萬葉集の助動詞ケリが「来」字で表記されることについて、それが「訓仮名」表記ではなく、「正訓的」表記であ

るとする。「来」字は、ケリ・ケル・ケレなど、音形態の違いを問わず諸活用形に用いられるのだが、ある訓仮名が、音形態の異なる諸活用形に広く充てられる例は他にないというのである。以下、私に例を補う。

z　年のはに梅は咲けどもうつせみの世の人我し春なかり来

（ケリ　巻十・一八五七）

石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりに来かも

（ケル　巻八・一四一八）

紀伊道にこそ妹山ありといへ玉くしげ二上山も妹こそあり来

（ケレ　巻七・一〇九八）

文献十二は、この「来」字が「正訓的」であっても、それがただちに助動詞ケリの起源を補助動詞ケリと見ることに結びつくものでもないと述べるが、意味上の同質性が感じ取られていたことの現れではあるとする。文献十二が指摘するように、既説において、助動詞ケリと補助動詞ケリの関連は、未だ十分に辿られたとは言えないようであるが、これまで多くそう言及されてきただけに、やはり両者には同質性が直観されるかと思われる。しかし、その詳細は本稿の課題とするところではない。ここでは、続紀宣命の表記が、助動詞ケリと補助動詞ケリの無縁性を反映するものではない、それを言うのであれば、むしろ両者の関連性を窺わせもすることを確認したのである。

結　語

本稿では、続紀宣命の表記に関して以下のことを述べた。

・訓字「来」は、補助動詞クル・ケリの表記に用いられる。空間的意味及びその延長線上の意味の場合、そのすべてが「来」字で記されるが、時間的意味における「来」字の使用は、「統治・服属の継承」を表す例に限られている。

・「来」字に仮名を送るものはケリ、送らぬものはクルと考えるのが適当である。

・助動詞のケリは音仮名表記、補助動詞のケリは訓字表記という区別がなされ、それは、両者の起源上の無縁性を反映するものであると見る向きもあるが、そのような現象は確認されない。

注

（1）続紀宣命の本文は『続日本紀宣命』（岩波文庫）によるが、適宜、新日本古典文学大系『続日本紀』（岩波書店）や、『続日本紀宣命』（吉川弘文館）を参照している。萬葉集については、日本古典文学全集『萬葉集』（小学館）によった。いずれも、引用に際して字体を私に改めた部分がある。

(2) 引用の「久流」は「大字+小字」であるが、「大字+大字」となる本文が中心である。しかし、その異同は以降の論述と特段の関わりがなく、よって本稿においてそれが問われることはない。

(3) 以下、二節と三節は、訓字「来」にまつわる考察である。したがって関係するのは補助動詞の例のみであるから、ケリとあれば、すべて補助動詞を指す。助動詞ではない旨、示すことはしない。

(4) 先述したとおり、「来」字を用いるのは、すべて補助動詞の例であるから、ここで言う「非時間的意味」とは、空間的意味及びその延長線上にあるものを指す。

(5) 本稿の見るところ、音仮名表記例に、空間的意味及びその延長線上にあるクル・ケリはない。よって、ここで言う「非時間的意味」は助動詞ケリということになる。

(6) 五七詔には「仕へ奉り来流」とあるが(sとして後に引く)、渤海使に対する例である。もちろん渤海は国内の氏族ではないけれど、続紀宣命においては、同じく代々天皇に服属する存在とされており、本稿でもその差異は捨象した。

(7) 「来」字単独の例たるmにも「今」の語がありはする。しかしながら、ここでの「今」は、過去からの継続が現在に至ることを明示するためのものではない。「今のみにあらず」と述べることによって、むしろ一般化を行う文脈なのである。

(8) 文献六などに言及がある。

(9) 用例nにおいても、このaと同様、助動詞ケリと見ようとすることによって、文脈の解釈に不自然さが生じる。が、行論としては重複となるため、具体的な言及は省略する。

文献

一 上田ノブ子 「続紀宣命における送り仮名について」 『香椎潟』六 一九六〇年

二 沖森卓也 『日本古代の表記と文体』 吉川弘文館 二〇〇〇年

三 春日政治 『金光明最勝王教古点の国語学的研究』 勉誠社 一九六九年

四 北川和秀 「続紀宣命の大字小字について」 『国語学』一二四 一九八一年

五 小谷博泰 『木簡と宣命の国語学的研究』 和泉書院 一九八六年

六 清水好子 「物語の文体」 『国語国文』十八・四 一九四九年

七 鈴木 泰 「上代語『けり』の意味」 『日本語文法体系と方法』 ひつじ書房 一九九七年

八 同右 「助動詞からのぞかれるべき『けり』について」 『東京大学国語研究室創設百年記念 国語研究論集』

汲古書院　一九九八年
九　竹内美智子「助動詞1」『岩波講座日本語7　文法Ⅱ』
岩波書店　一九七七年
十　長尾　勇「『続紀宣命』についての研究　仮字の用字法を中心として」
『日本大学文学部研究年報』一　一九五一年
十一　野村剛史「存在の様態　シテイルについて」
『国語国文』七二・八　二〇〇三年
十二　同右「源氏物語のテンス・アスペクト」
『源氏物語のことばと表現』　おうふう　二〇〇七年
十三　山田瑩徹「続紀宣命における宣命書について」
『語文』十八　一九六四年
十四　吉田茂晃「けりの時制面と主観面」
『国語学』一五七　一九八九年
（くりた　がく・東京大学大学院生）

紹介

浅見徹著『万葉集の表現と受容』

坂本信幸

本書を御恵贈いただいた時に、筆者である浅見氏からの次のような一筆が添えられていた。

一冊贈呈いたします。

おおかたの方々は、最後の「あとがき」のページだけ御覧ください。そんなことをいいたいためにこの本をこしらえたようなものですから。

最後まで素直でない、ですね。

礼状、受取、御批評などなど、どうぞ御放念ください。

浅見　徹

いかにも浅見氏らしい一文で、確かに「素直」ではない。しかし、衒気のない淡々とした氏の思いが滲んでいるように思えた。その「そのあとがき」には、「もとより、高遠な目標を掲げて孜々として研鑽に励むという資質はなく、その折その時の興の赴くままに書き散らしてきたことも、そこは一個人のなせる業、こうしてみると自らある種の方向性が見えてくるかなと思います」と記されている。何気ない述懐のような思えるが、そのことが本書の大きな魅力でないかとわたしは思う。興の動きもしないことを、論文を書くべく探究して書く論の多くは、面白くなく、意味もない。本書にはなによりも浅見氏の興があり、それが読者の興を惹くのである。

本稿は「紹介」であって、「などなど」の解釈にもよろうが、「礼状、受取、御批評などなど」御放念あれ、と仰有った浅見氏の意を無視したものではないことを申し添えておく。

本書は、以下のような内容からなる。

女性の係わる歌群

但馬皇女歌群
石川女郎歌群
大来皇女歌群
笠女郎歌群
紀女郎歌群

歌の背景

山振の立ち儀ひたる山清水
紅葉をしげみ
旅人の讃酒歌
ひとり寝の歌
坂上郎女と髪
雪は降りつつしかすがに
高安王左降さる
中臣宅守の独詠歌
意吉麻呂の物名歌

歌の状況

言霊の行方
筑波山の嬥歌
歌われぬ動植物
伎倍の林に汝を立てて

上代の東国方言

東歌・防人歌の解釈の方法

「女性の関わる歌群」の諸論は、女性の作品を中心対象にして、当時の読者の受容という視点を考慮に入れて論じた作品論・歌群論である。また、「歌の背景」は、表現の一形式である歌が表現され、受容される、読み手と聞き手との間における共通性をどのように求めるべきか、その背景をさぐった諸論からなる。なかでも酒をお飲みにならない浅見氏が書かれた「旅人の讃酒歌」は、飲酒を好む輩にとって興味深い論である。「歌の状況」は、ことばの表面的意味理解だけでなく、万葉の時代の人々の受け止めたであろう意味に立って歌を理解すべく、いくつかの問題について考えた諸論からなる。「上代の東国方言」は、東歌や防人歌に見られる東国俚言について、それが「観念的俚言」である可能性について論じたものである。

本書を読んでいると、つい浅見氏が国語学者であったことを忘れてしまう。「雪は振りつつしかすがに」の論や「歌われぬ動植物」の論を読んで、そうだった浅見氏は国語学者だった、と思い

起こすのである。それほどに、本書は文学・語学といった領域を融通無碍に横断している。本来古典研究というものはそういったものであったはずである。本居宣長は国語学者か国文学者か、と考えてみても意味がない。

私事にわたって恐縮であるが、わたしの最初の『萬葉』への掲載論文は、卒業論文を基にしてまとめた「万葉集巻十四東歌私見」という論文（『萬葉』第七十三号に掲載）であったが、その論を作成する中でわたしは、浅見氏の「上代の東国俚言―東歌・防人歌の解釈方法に関する問題―」（『萬葉』第四十号）に多大の学恩を蒙ったことがある。本書の「上代の東国方言」はその論をさらに進展させているものであるが、読みながら大変なつかしい思いがした。沢瀉久孝先生の頃からの初期の萬葉学会編輯委員の中では、浅見氏がもっとも若く、われわれ若手の委員は、いつ頃からか初期の編輯委員の先生方を「浅見以老」という敬称（？）でもってお呼びするようになっていたが、その浅見氏も昨年喜寿を迎えられた。かつての若手も還暦を過ぎた。なつかしいはずである。

しかしながら、本書の諸論文は「なつかしい過去の」論文ではない。心惹かれる意味の「なつかしさ」をもった新しい論文である。

ところで、「あとがき」に「自らある種の方向性が見えてくる」と仰有った方向性とはどういう方向性であろうか。目次だけを見ていると、「女性の係わる歌群」を真っ先に置いたところに方向性があるようにも思える。それは女性たちに対しての著者のやさしさの現れであるかのようである。

はたして如何なる方向性が見て取れるのか、それは本書を購入してそれぞれの読者がお考えいただくことである。

（二〇〇七年九月二五日、和泉書院刊　定価一〇、五〇〇円）

（さかもと　のぶゆき・奈良女子大学大学院教授）

予告

○萬葉学会第六十一回全国大会

平成二十年度の全国大会を、皇學館大学との共催により、左記のように開催する予定です。

記

開催日　平成二十年十月十八日(土)から二十一日(火)まで。

第一日(十月十八日)午後

公開講演会

会場　皇學館大学(伊勢学舎)百周年記念講堂

講演

ウタとともにカタル―赤猪子物語論―　北海道大学大学院教授　身崎　壽　氏

歌木簡と人麻呂歌集の書記をめぐって　大阪市立大学名誉教授　武庫川女子大学教授　毛利正守氏

懇親会

伊勢シティホテル

第二日(十月十九日)全日

研究発表会

会場　皇學館大学(伊勢学舎)二号館　二三一教室

第三日～第四日(十月二十日・二十一日)　一泊二日

臨地調査研究　熊野三山をめぐる

○研究発表者募集

内容　上代の言語・文学に関する各分野の研究

時間　発表三十分　質疑応答十五分

応募締切　平成二十年六月三十日(月)

研究発表ご希望の方は、題名・氏名・所属を明記の上、要旨(八百字以内)を添えて、学会本部(大阪市立大学文学部国語国文学研究室)あてにお申し込み下さい。なお、発表をお願いする場合には、八月末日までに要項集の版下原稿の作成をお願いしますので、昨年度の要項集をご参照の上、予めご用意下さい。

以　上

「萬葉」通巻目次

（創刊号〜第二百号）

この目次は、「萬葉」所載の論文（黄葉片々を含む）、講話、索引、新資料の翻刻・紹介、および書評・新刊紹介を一覧に供するものである。萬葉・万葉両様の表記は、便宜上、萬葉に統一し、また題名について、表紙と本文とで相違がある場合は、原則として本文のそれにより、明らかな誤植には訂正を加えた。なお、書評・新刊紹介には＊印を付けた。

創刊号（昭和二十六年十月）

萬葉集金砂子切　解説　澤瀉　久孝
「萬葉集」書名の意義　鈴木　虎雄
紀皇女と多紀皇女　吉永　登
萬葉集雑歌の典拠をめぐつて　伊藤　博
「莫囂円隣」の歌訓詁私按　澤瀉　久孝
独りのみきぬる衣の　佐竹　昭広
彼方の赤土少屋にこさめふり　木下　正俊
往左来左君社見良目　尾埜よしゑ
序詞句格補説 —「渡津海乃豊旗雲爾　伊理比沙之」—　森重　敏
萬葉集の助詞「が」「の」の或る場合　西宮　一民
由阿の伝について　濱口　博章
萬葉集講話　一　澤瀉　久孝

第二号（昭和二十七年一月）

鴨川考　新村　出
萬葉集歌表現の一面　小島　憲之
憶良の長歌　清水　克彦
巻十六「饌具雑器」をめぐつて　橋本　四郎
「芳野よく見よ良き人よく見」　澤瀉　久孝
「草等良牟」考　加藤　順三
「片思ひを馬にふつまに」の歌私解　阪倉　篤義
「甚」字の訓について　武智　雅一
萬葉集曝井の武蔵国説　望月　久貴
萬葉集講話　二　澤瀉　久孝
特殊仮名遣表（附録）解説　上野　務
＊美夫君志会編「萬葉集新説」　小島　憲之

第三号（昭和二十七年四月）

萬葉集と古今六帖　山田　孝雄
紀皇女に就て　尾山篤二郎
遊仙窟と萬葉集 —三八三四の歌について—　土橋　寛
「或本反歌二首」（424 425）小考　内田　暁郎
萬葉集訓詁断片 —あたゆまひ、ことよりの、いもがここり—　大野　晋
萬葉集講話　三　澤瀉　久孝
＊創元社刊「萬葉集講座」第一巻　伊藤　博

第四号（昭和二十七年七月）

萬葉集本文批評の一方法　佐竹　昭広
斉明天皇論　田邊　幸雄
中皇命と有馬皇子　田中　卓
萬葉集の用字 —「去来」のこと「天漢」のことなど—　神田　秀夫
憶良の貧窮問答のうたの訓ふたつ　亀井　孝
小治田之年魚道之水　奥野　健治
萬葉集はなぜ訓めるか　池上　禎造
尾山氏に答へる —「紀皇女に就いて」—　吉永　登
萬葉集講話　四　澤瀉　久孝

研究発表要旨
萬葉集形容詞攷（きよし・さやけし）　渋谷　虎雄
人麿長歌の位置　清水　克彦
青雲考　吉井　巌
「故奈乃思良爾禰爾」補説私案　富田　大同
巻十六『伊夜彦』復原私考　和田　徳一
海宮訪問説話について　守屋　俊彦
入声音より見た人麻呂の用字法　三吉　陽

第五号（昭和二十七年十月）

相聞の意義 ―萬葉集三大部立の地位と性格―　伊藤　博
萬葉集の芸術史的位置 ―古代文芸の様式について―　中村　茂夫
青雲攷　吉井　巌
萬葉集「紅梅」考 ―一六四四の歌について―　本田　義彦
舟公宣奴島爾 ―「その」について―　塚原　鉄雄
萬葉の指示語　井手　至
仮名字母より見たる萬葉集巻十四の成立過程について　福田　良輔
萬葉集講話　五　澤瀉　久孝
かけておもふ　阪倉　篤義
「誰爾絶多倍」　木下　正俊
「後」と「復」　佐竹　昭広
憶良の「好去好来」　小島　憲之

第六号（昭和二十八年一月）

潤和川と潤井川　新村　出
記紀歌謡と初期萬葉 ―上代説話と歌謡とのある場合―　久松　潜一
巫女の嘆き　吉永　登
人麿長歌の位置 ―口誦歌と記載歌―　清水　克彦
防人等　益田　勝実
萬葉集の芸術史的位置（下） ―古代文芸の様式について―　中村　茂夫
萬葉集講話　六　澤瀉　久孝
真淵草稿本「竹取翁長歌解」について　神堀　忍
回想の歌二三首　神田　秀夫
舟公宣奴島爾私案　尾山篤二郎

第七号（昭和二十八年四月）

『萬葉集』における心情表現の特性 ―「心に乗る」「乗りにし心」といふいひ方について―　北住　敏夫
白鳳の宮廷詩人 ―山柿の問題に寄せて―　北山　茂夫
露霜攷　武智　雅一
「梅の花咲き散る園」私考　和田　徳一
入声音より見た人麻呂の用字法　三吉　陽
東歌研究のノートから ―三五六一・三五二九・三五二六・三五五六の歌―　後藤　興善
助動詞「たり」の形成について ―「てあり」と「たり」―　春日　和男
萬葉集講話　七　澤瀉　久孝
浜木綿の百重なす考　小清水卓二
萬代に過ぎむと念へや　内田　暁郎

第八号（昭和二十八年七月）

譬喩歌の性格　扇畑　忠雄
萬葉貴族の生活圏 ―萬葉集の歴史的背景―　薗田　香融
人麿における推定表現の丹精　森重　敏
「わわらば」と「わくらば」 ―誤写と意味の移入による古語誤解の一例―　井手　至
「何時辺乃方」考　野中　春水
「球手折」考　竹岡　正夫
萬葉集講話　八　澤瀉　久孝

袖中抄と類聚古集　吉永　登
「三袖」存疑　佐竹　昭広
「越野過去」訓義私按　木下　正俊

第九号（昭和二十八年十月）

山柿の論　久松　潜一
大伴家持の語彙　蜂矢　宣朗
萬葉集歌修辞の一面　伊藤　博
巻十四の「中麻奈」　都竹通年雄
紀皇女をめぐる論争について　田中　卓
—併せて高安王の系譜を論ず—
「トガ野」の鹿と「ヲグラ山」の鹿　小島　憲之
—萬葉伝誦歌をめぐつて—
上代歌謡語釈小考　曾田　文雄
「八多籠」　橋本　四郎
藐孤射考　森　安太郎
*澤瀉久孝博士著「萬葉古径　三」を読む　倉野　憲司
*「萬葉の世紀」を読む　吉永　登

第十号（昭和二十九年一月）

萬葉集における部類の基準として　武田　祐吉
の時間
元暦校本萬葉集巻十七の一性質　吉井　巌
無常観—旅人の歌をめぐつて—　井手　恒雄
脣内韻尾の省略される場合　木下　正俊
三條西実隆の萬葉研究　大久保　正
—一葉抄について—
天理図書館蔵萬葉集関係書籍　中村　幸彦
展覧会目録
萬葉集講話　九　澤瀉　久孝
手玉鳴裳　佐伯　梅友
「雪のくだけしそこに散りけむ」　澤瀉　久孝

第十一号（昭和二十九年四月）

潤和川再考　新村　出
古点の成立と後撰集の萬葉歌　奥村　恒哉
萬葉集「小竹島」考　松田　好夫
京大本本詞林采葉抄攷　濱口　博章
湯原王打酒歌評釈の試み（上）　橋川　時雄
萬葉集講話　十　澤瀉　久孝
山部王について　山崎　馨
旅行きも之思良奴君　関守　次男
吾は恋ふるか相ふ縁なしに　伊藤　博

第十二号（昭和二十九年七月）

奈良時代のヌとノの萬葉仮名について　大野　晋
同音節反復の場合の用字法について—萬葉集を中心として—　鶴　久
「心もとけて」　大野　雍熙
湯原王打酒歌評釈の試み（下）　橋川　時雄
西荘文庫旧蔵の岑柏集　吉永　登
萬葉集講話　十一　澤瀉　久孝
「火気」・「如」の訓など　佐竹　昭広

第十三号（昭和二十九年十月）

蘆が散る難波　風巻景次郎
「青雲の星離れゆき月を離れて」　澤瀉　久孝
「紀之許能暮之」考　井手　至
—本文溯原の一つの試み—
コロンブスの卵　大濱厳比古
—「島隠る」か「山隠る」か—
皇極紀童謡の実体　土橋　寛
萬葉集における助詞「を」　諏訪　嘉子
奈可弭考　吉永　登
竹岡氏の捄手折考をよみて　真鍋　次郎

第十四号（昭和三十年一月）

あまのひつぎ考　武田　祐吉
大伴の家持の用語の一として
わざうた考　田邊　幸雄
拾遺集の萬葉歌　奥村　恒哉
七五調の成立に就いて　瀬古　確
「水鳥二四毛有哉」其他　木下　正俊
越の俗語あゆの風考　三辺清一郎
竹取翁歌と孝子伝原穀説話　西野　貞治
萬葉集講話（十二）　澤瀉　久孝
萬葉集「宇敝可多山」考　本田　義彦

第十五号（昭和三十年四月）

上代の形容詞語尾ジについて　橋本　四郎
雑歌成立の一形態 —新婚のこと
ほぎ歌をめぐつて—　伊藤　博
越中守家持の作品をめぐつて　吉井　巌
「親魄相哉」について　吉永　登
大伴家持小論　北山　茂夫
萬葉集講話（十三）　澤瀉　久孝
いもとありしときはあれども　大濱厳比古
大伴氏の竹田の庄　山田　弘通
*The Manyôsû Translated and annotated Book VIII by Dr. J. L. Pierson　小島　憲之

第十六号（昭和三十年七月）

萬葉集の神宮文庫本と西本願寺本　上田　英夫
萬葉語「ハタ」の周辺　小島　憲之
浦島の歌に見える玉篋の
　タブー発想について　西野　貞治
代名詞「し」について　森重　敏
「阿加古比須奈牟」私按　木下　正俊
萬葉集講話（十四）　澤瀉　久孝
紫染聞書　扇畑　忠雄
「伊予の高嶺」私考　武智　雅一
萬葉集読添訓索引 —助詞の部—　蜂矢　宣朗

第十七号　解釈特輯号（昭和三十年十月）

埋もれた言語と埋もれた訓詁　亀井　孝
いまのをづつ考　武田　祐吉
「足荘厳」と「檀越」　正宗　敦夫
「宇多我多毛」劄記　阪倉　篤義
「むささびは木ぬれ求むと」
黒人の「旅にして」の歌の訓釈　吉永　登
　　森本　治吉
「しひがたりといふ」　澤瀉　久孝
「神之諸伏」の訓　伊丹　末雄
「毛無之岳」の訓　春日　政治
叩々　ものをおもへば　小島　憲之
考へられる訓詁一つ　伊藤　博
「恋故にこそ」　井手　至
百人一首の柿本人丸の歌　山田　孝雄
地底不落の訓について　山崎　馨
角のふくれ　真鍋　次郎
碓氷の坂を越えしだに　春日　和男
うつらうつら考　大坪　併治

第十八号（昭和三十一年一月）

志賀白水郎歌十首　澤瀉　久孝
相聞の系譜　伊藤　博
朝歌考　中臈　清臣
服曾比猟　佐藤喜代治
大伴乃御津　風巻景次郎
萬葉歌枕に関する疑問二三　大井重二郎
萬葉集読添訓索引（続）
—助詞の部—　蜂矢　宣朗

第十九号（昭和三十一年四月）

上代敬語動詞成立考　木下　正俊
元暦校本萬葉集巻第十七、巻第十八の書写上の異同をめぐつて　神堀　忍
鳴島考再説　荒木　良雄
人麿の反歌一首―意味論的考察―　佐竹　昭広
萬葉集講話（十五）　澤瀉　久孝
「語りつぎ言ひつぎゆかむ」　大濱厳比古
*村木清一郎著　訳萬葉　大濱厳比古

第二十号（昭和三十一年七月）

「広さと「狭さ」―上代における連体格助詞の用法について―　浅見　徹
「しののめ・いなのめ」攷―原始的住居と「め」―　井手　至
人麿集の書式をめぐつて　阿蘇　瑞枝
志賀白水郎歌十首の原形・原意の問題　笠井　清
立山と片貝川―立山賦地理考―　広瀬　誠
「萬葉考」自筆の一稿本　中村　幸彦
萬葉集講話　十六　澤瀉　久孝
*土橋寛著「萬葉集―作品と批評―」　吉永　登

第二十一号（昭和三十一年十月）

序詞の源流　土橋　寛
いくひさゝ考　大坪　併治
萬葉集における「者」字の用法―「中中者」の訓をめぐつて―　鶴　久
机之島考―「所聞名禰」の訓をめぐつて―　大谷　寛治
類聚歌林の形態について　吉永　登
萬葉集講話（十七）　澤瀉　久孝
*山田孝雄著　萬葉集と日本文芸　濱口　博章
*犬養孝著　萬葉の風土　清水　克彦
*尾山篤二郎著　大伴家持の研究　直木孝次郎
*佐佐木信綱著　萬葉集事典　蔵中　進

第二十二号（昭和三十二年一月）

反語について―ヤとカの違ひなど―　阪倉　篤義
遣新羅使人等の無記名歌について　藤原　芳男
巻十五に対する私見　加藤　順三
阿胡行宮攷　山田　弘通
萬葉集「行靡闕矣」考―巻十三・三二四二の本文復原―　松田　好夫
記紀の古さ―格助詞「の」「が」の用法から―　浅見　徹
萬葉集講話（十八）　澤瀉　久孝
明日香川　川淀さらず立つ霧の異伝発生のある場合　吉井　巌
*春日政治博士著「古訓点の研究」を読んで　神堀　忍
　　木下　正俊

第二十三号（昭和三十二年四月）

萬葉のあま―萬葉学会講演―　高木市之助
古今和歌六帖の萬葉歌について　大久保　正
人麻呂の表現と史実―所知食世者と申賜者をめぐつて―　伊藤　博
「来す」と「越す」　木下　正俊
萬葉集講話（十九）　澤瀉　久孝
敦煌石室の仏説延寿命経について　西野　貞治
*池田源太著「歴史の始源と口誦伝承」　守屋　俊彦
*「萬葉歌人の誕生」を読んで　高木市之助
萬葉集「行靡闕矣」考修正　松田　好夫

第二十四号（昭和三十二年七月）

萬葉集の「見」―文体論的考察―　森重　敏
七夕歌と柿本人麿集　後藤　利雄

柿本人麻呂の世界　清水　克彦
萬葉集講話(二十)　澤瀉　久孝
嬬の命のたたなづく柔膚　大野　保
「目をやすみ」　井手　至
積雪彫成重巌之起　三辺清一郎
うまし　橋本　四郎
*日本古典文学大系 萬葉集 一　木下　正俊

第二十五号　人麻呂特輯号（昭和三十二年十月）

人麿の長歌と短歌 ―特に短歌の声調について―　岡崎　義恵
人麻呂長歌寸言　五味　智英
人麿作品の形成 ―註記・或本歌の論―　松田　好夫
叙景歌と人麻呂 ―その成立の契機としての「靡けこの山」―　大濱厳比古
龍田山と狭岑島 ―人麻呂に於ける神―　木下　正俊
人麻呂と風土 ―さみねのしま―　犬養　孝
*田邊幸雄著「初期萬葉の世界」　伊藤　博

第二十六号（昭和三十三年一月）

反歌攷序説　吉井　巌
ねころもに君が聞こして ―大伴坂上郎女私攷―　藤原　芳男
憶良の用語「それ」と「また」 ―助字の修辞的利用―　井手　至
準不足音句考　木下　正俊
光明皇后筆の杜家立成をめぐつて　西野　貞治
萬葉集講話(廿一)　澤瀉　久孝
*『古代歌謡集』読後覚え書　阪倉　篤義
*大久保正著『萬葉の伝統』を読む　石井　庄司

第二十七号（昭和三十三年四月）

萬葉語 ―その口語性をめぐつて―　小島　憲之
「葦垣の思ひ乱れて」 ―枕詞「葦垣の」考ノ内―　賀古　明
萬葉語「はた」の意味用法をめぐつて ―附「半手不忘」の解明―　井手　至
奈良遷都途中の歌について　吉永　登
我れし行きなば靡け篠原　西宮　一民
近江荒都の歌　清水　克彦
「濃」の仮名遣其他　木下　正俊
*萬葉集注釈巻第一を読む　土屋　文明

第二十八号（昭和三十三年七月）

引用 ―上代語の場合―　川端　善明
歌の転用 ―萬葉歌の一解釈―　伊藤　博
大伴旅人の帰京行程　宮本喜一郎
萬葉集における用字法の一面 ―「往」「限」の訓との関聯において―　鶴　久
萬葉のカマメ　山本徳太郎
佐宿木花　真鍋　次郎

第二十九号（昭和三十三年十月）

相聞歌異見　澤瀉　久孝
副詞ホトホト(二)の意味構造　井手　至
山部赤人の「叙景歌」私見　稲村　栄一
「隼人乃湍門」考　花田　昌治
「萬葉考」の校本　河野　頼人
新撰字鏡と遊仙窟　蔵中　進
遊仙窟の影　小島　憲之
「濱松之上於雲棚引」 「萬葉のカマメ」を読んで　蜂矢　宣朗
　川村多実二

第三十号（昭和三十四年一月）

「ことば」と「字音仮名」—上代語の清濁を中心に—　橋本　四郎
「入日哉」其他　木下　正俊
連体格を構成する助詞二つ—格助詞〈な〉と格助詞〈つ〉と—　塚原　鉄雄　塚原　幸子
「乱れいづ見ゆ」か「乱れていづ見ゆ」か　鶴　久
*萬葉集注釈巻第二を読んで　森本　治吉

第三十一号（昭和三十四年四月）

軽の妻死せる時の歌—人麻呂の作歌精神—　清水　克彦
「八船多気」をめぐつて　西宮　一民
「水島」考　鶴　久
玉葉和歌集中の萬葉歌覚書　濱口　博章
萬葉集講話（廿二）　澤瀉　久孝
「落易」の訓など　伊藤　博
朝月日向黄楊櫛　橋本　四郎
「耆矣奴」考　加地　伸行　小島　憲之
動詞「ウラム」古活用臆断　木下　正俊

第三十二号（昭和三十四年七月）

萬葉語イハバシル・ハシリヰ・ハシリデ　井手　至
「しこる」「あきじこる」攷　吉田　金彦
宇麻宇知牟礼底　須田善四郎
笠女郎の歌の位置　服部喜美子
読添へと書添への間—連想的読添へ表記と連想的書添へ表記—　蜂矢　宣朗
「見所久思」考　西宮　一民
「佐檜の隈み」考　山田　弘通

第三十三号（昭和三十四年十月）

訓仮名をめぐつて　橋本　四郎
連歌源流の考—佐保河之水乎塞上而の歌を中心に—　島津　忠夫
絶えむの心わが思はなくに—陳述をめぐる問題—　浅見　徹
筑波嶺に雪かも降らる　木下　正俊
往布勢水海道中馬上口号二首　藤原　芳男
*神田秀夫氏著『古事記の構造』　西宮　一民
*谷　馨著『萬葉武蔵野紀行』　蜂矢　宣朗
*澤瀉久孝博士『萬葉集注釈』巻三・四　萬葉七曜会

第三十四号　澤瀉久孝博士古稀記念号（昭和三十五年一月）

古事記の「寝」字—「大御寝也」の試訓その他—　門前　真一
「古事記」のシについて　福田　良輔
萬葉解釈におけるアキレスの踵　土橋　寛
萬葉代匠記初稿本に関する一二の問題　吉永　登
正訓字の整理について　池上　禎造
萬葉集第十五番の歌「渡津海乃…清明己曾」のよみについての私見　亀井　孝
萬葉集の時代区分　扇畑　忠雄
出典問題をめぐる貧窮問答歌　小島　憲之
萬葉語彙の構造—（その一）名詞について—　阪倉　篤義
倭建命とその周辺をめぐつて　吉井　巌
誤字説をめぐつて—「峯（稔）」と「岫（岬）」の場合—　西宮　一民
訛伝の定着　木下　正俊
本文批評の根柢　澤瀉　久孝

第三十五号（昭和三十五年四月）

反歌としての短歌の成立過程 ―文体論的考察― 森重 敏
長屋王故郷歌一首 中西 進
*澤瀉博士著「萬葉集注釈 巻第五」 倉野 憲司
*日本古典文学大系『萬葉集』(二) 木下 正俊
*伊藤博氏著「萬葉集相聞の世界」 青木 生子

第三十六号（昭和三十五年七月）

上代語の清濁 ―借訓文字を中心として― 西宮 一民
萬葉集における借訓仮名の清濁表記―特に二音節訓仮名をめぐつて― 鶴 久
雲の上に鳴くなる雁の ―右大臣橘家宴歌― 藤原 芳男
「しこる」「あきじこる」の周辺 原田 芳起
阿倍乃嶋と佐農能岡 荒木 良雄
*銭稲孫訳「漢訳萬葉集選」 伊藤 博

第三十七号（昭和三十五年十月）

旅人の宮廷儀礼歌 清水 克彦
舎人と挽歌 ―人麻呂舎人説の基礎的考察として― 阿蘇 瑞枝
萬葉集問目と比較してみた狛諸成の萬葉考増訂 河野 頼人
沈む女 ―その伝承の背景― 吉井 巌
「打布裳」の訓について 蔵中 進
*清水克彦氏著「萬葉集序説」 吉井 巌

第三十八号（昭和三十六年一月）

子規及びその後続者たちの萬葉観 土屋 文明
憶良の歌に見られるもの二つ 吉永 登
類聚古集の部類 神堀 忍
はちす ―戯笑歌の一解釈― 伊藤 博
夜 隠 中西 進
中臣宅守茅上娘子贈答歌 藤原 芳男
*萬葉集注釈巻六を読んで 久松 潜一

第三十九号（昭和三十六年五月）

「見る」ことのタマフリ的意義 土橋 寛
家持の芸境 横井 博
萬葉集歌の伝承 ―継色紙集の場合― 金井 清一
ツノサハフ・シナテル・シナタツ ―枕詞の解釈をめぐつて― 井手 至
「布靡越者」について 西宮 一民
*日本古典文学大系「萬葉集(三)」 橋本 四郎

第四十号（昭和三十六年七月）

上代の東国俚言 ―東歌・防人歌の解釈の方法に関する問題― 浅見 徹
枕詞と呪農 ―「花散らふ」と「み雪ふる」の発想― 桜井 満
紀女郎の諧謔的技巧 ―「戯奴」をめぐつて― 井手 至
石中の死人を見て作れる歌 ―人麻呂における歌の実用的性格について― 清水 克彦
夏の野にわが見し草は 藤原 芳男
*土橋寛氏著『古代歌謡論』を読む 吉永 登

第四十一号（昭和三十六年十月）

「しみら」と「すがら」―ヒネモス・ヨモスガラの意味― 阪倉 篤義
「具フ」の仮名遣をめぐつて 西宮 一民
人麻呂集戯書「開木代」について 井手 至

仙覚新点歌流伝の一形態　濱口　博章
いづちむきてかあがわかるらむ　真鍋　次郎
憶良「思子等歌」序文の典拠　井村　哲夫

第四十二号（昭和三十七年一月）

ミの形をめぐる問題　橋本　四郎
所謂形容詞のカリ活用及び打消の助動詞ザリについて
—特に萬葉集における義訓すべき不安、不遠、不近、不悪、不有をめぐつて—　鶴　久
雄略御製の伝誦　中西　進
沈む女（一）
—佐用比売伝説をめぐつて—　吉井　巌

第四十三号（昭和三十七年四月）

八雲立つ出雲　土橋　寛
仙媛贈答歌の性格　清水　克彦
動詞の接辞化
—萬葉の「行く」と「来」—　井上　展子
仮名表記と読添へ　蜂矢　宣朗
治者　木下　正俊

第四十四号（昭和三十七年七月）

「なに」と「いかに」と　木下　正俊
人麿作品の形成　中西　進
歌日誌の空白—歌わぬ詩人家持—　伊藤　博
*澤瀉久孝博士著『萬葉集注釈』巻第七　松田　好夫
*澤瀉久孝博士『萬葉集注釈』巻第八　大久保　正

第四十五号（昭和三十七年十月）

見る歌の発想形式について
—「見ゆ」を中心に—　吉井　巌
吉備津采女死せる時の歌
—柿本人麻呂論の内—　清水　克彦
田辺福麿之歌集と五つの歌群
—その用字を中心として—　古屋　彰
助詞「し」の説—係機能の周辺—　川端　善明
*日本古典文学大系『萬葉集』（四）　西宮　一民
*『萬葉集注釈』巻第九を読んで　扇畑　忠雄
*澤瀉久孝先生著『萬葉集注釈巻第十』を読んで　石井　庄司

第四十六号（昭和三十八年一月）

歌の解釈　阪倉　篤義
二つの「賀」から　木下　正俊
萬葉の郎女　藤原　芳男
巻十七の対立異文の持つ意味　木下　正俊
紐　二　題
「ただならずとも」と「つけし紐とく」　吉井　巌
大鳥の羽易山　大濱厳比古

第四十七号（昭和三十八年四月）

吉野　宮本喜一郎
東歌の「可牟思太」「可牟能禰」について　後藤　利雄
「萬葉考」巻七以下に見られる本文批評　河野　頼人
助詞「も」の説—文末の構成—　川端　善明
礒城皇子と「河内王」　神田　秀夫

第四十八号（昭和三十八年七月）

憶良「思子等歌」の論　井村　哲夫
「何処より来りしものぞ」　柳川　清
風雅集中の萬葉歌続考　渋谷　虎雄

助詞「も」の説 ―二、心もしのに鳴く千鳥かも― 川端 善明
許氏多受久母可 橋本 四郎
*小島憲之博士の大著『上代日本文学と中国文学 上』を読む 倉野 憲司

第四十九号（昭和三十八年十月）

萬葉集に於ける記号としての一云と或云 藤原 芳男
「所依」「所縁」試訓 木下 正俊
石橋と岩橋 井手 至
日下の直超 西宮 一民
履はけ我が背 後藤 利雄
*太田善麿著『古代日本文学思潮論』（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ） 西宮 一民
*中西進氏著『萬葉集の比較文学的研究』を繙いて 井手 至
*「萬葉語研究」再版に寄せて 木下 正俊
*渋谷虎雄氏著「古文献所収萬葉和歌索引」 濱口 博章

第五十号（昭和三十九年一月）

「あれをとめ」考 土橋 寛
「はばき」 橋本 四郎
萬葉集における「可」「応」字の用法 鶴 久
狛諸成の萬葉考増訂の方法をめぐつて 河野 頼人
題詞の権威 ―旅の歌の一解釈― 伊藤 博
壱岐対馬行 澤瀉 久孝
*萬葉集注釈巻第十一を読む 佐伯 梅友

第五十一号（昭和三十九年四月）

高市挽歌論 ―高木氏の所論に関連して― 吉田 義孝
音訓両用の仮名について 稲岡 耕二
新撰萬葉集の用字 ―基礎作業として、助詞の表記について― 浅見 徹
飜刻 荒木田久老『竹取翁歌解』

第五十二号（昭和三十九年七月）

崇神・垂仁の王朝 ―人名構成の一要素イリの検討に関聯して― 吉井 巌
「日下の直超」説に対する疑点数条 奥野 健治
筑前守憶良の同僚・下僚 井村 哲夫
翻刻 荒木田久老『竹取翁歌解』訂正

第五十三号（昭和三十九年十月）

上代伝承試論―聖徳太子片岡説話をめぐつて― 高 壮至
「なり」の表記の意味するもの ―萬葉集について― 田島 光平
額田王覚書 ―歌人額田王誕生の基盤と額田メモの採録― 吉井 巌
「溢す」と「毀つ」 木下 正俊
*故秋本吉郎氏著『風土記の研究』を繙いて 井手 至

第五十四号（昭和四十年一月）

初期萬葉の創造的世界 清水 克彦
大伯皇女と大津皇子 神堀 忍
依巨勢道考 山田 弘通
近江荒都歌の文学史的意義（上） 伊藤 博
*萬葉集注釈巻第十二を読む 春日 和男
*犬養萬葉 ―犬養孝博士著「萬葉の旅」を読み了えて― 大濱厳比古

第五十五号（昭和四十年四月）

近江荒都歌の文学史的意義（下） 伊藤 博
「擬人麿歌」考 川口 常孝
山水方めて滋し 中西 進

竹取翁歌ところどころ　橋本　四郎
大宰帥大伴卿傍従等の羈旅の歌
金村の歌一首 ―巻三・三六七番―　藤原　芳男
故　無　考　井村　哲夫
　　真鍋　次郎

第五十六号（昭和四十年七月）

歌と物語の交渉　土橋　寛
上毛野伊奈良の沼考
―萬葉地理の一環として―　高橋　和夫
孝徳紀御製私解　飯塚　誠
「露重し」考　神堀　忍
手火の清濁　小島　憲之
旧訓の意味するもの
―白髪為子等母生名者―　木下　正俊
*萬葉集注釈巻十三を読んで　稲岡　耕二
*新刊　三品彰英博士編
「日本書紀研究」第一冊　五味　智英
　　小島　憲之

第五十七号（昭和四十年十月）

萬葉集における美人　渡部　和雄
日本挽歌
―主としてその構成について―　村山　出
梅花歌三十二首の成立事情　原田　貞義
借訓仮名の多様性
―新撰萬葉集の場合―　浅見　徹
*佐竹・木下・小島三氏「萬葉集」　鶴　久

第五十八号（昭和四十一年一月）

萬葉集における「らむ」と
「といふ」との交渉　森重　敏
四八番の歌私按　真鍋　次郎
「清江乃木笑松原」私按
―交用表記中の「笑」に就きて―　稲岡　耕二
*尾崎暢殃（『萬葉集の発想』）・
山口正（『萬葉修辞の研究』）
両氏の近著を読む　伊藤　博

第五十九号（昭和四十一年四月）

同形歌少異歌攷―萬葉集の本質―　伊藤　博
日本霊異記の筆録　植垣　節也
書紀の出典をめぐる二、三の問題　西宮　一民
「弟世」と「伊呂勢」
―「世」字書添えの意義―　稲岡　耕二
*澤瀉久孝博士の
「萬葉集注釈巻十五」を読む　神田　秀夫

第六十号（昭和四十一年七月）

桓武・平城朝の文学 ―其の一―　小島　憲之
大宝二年　中西　進
若い虫麻呂像　井村　哲夫
萬葉の連作
居り居りて物にい行くとは　扇畑　忠雄
　　橋本　四郎

第六十一号（昭和四十一年十月）

萬葉集東歌の掛詞について（上）　大久保　正
聖徳太子片岡説話の形成　蔵中　進
火中出産ならびに海幸山幸説話の
天皇神話への吸収について　吉井　巌
*土橋寛著
「古代歌謡と儀礼の研究」　上田　正昭

第六十二号（昭和四十二年一月）

宮廷歌人田辺福麻呂
―橘諸兄との関連について―　橋本　達雄
萬葉集における人麻呂歌集の採録
―略体・非略体の認定をめぐって―　渡瀬　昌忠
萬葉集東歌の掛詞について（下）　大久保　正
「葦附　水松之類」私考　和田　徳一
*萬葉集注釈第十四を読んで　福田　良輔
*澤瀉博士喜寿記念
萬葉学論叢（文学関係）　大久保　正

第六十三号（昭和四十二年四月）

萬葉終末期における大伴家持と藤原一族（上）　神堀　忍
防人歌の発想—文部の歌を中心に—　桜井　満
仮名遣を通して見たる住吉大社神代記　西宮　一民
わが衣人にな着せそ　藤原　芳男
池主の戯歌　古屋　彰
*澤瀉久孝博士著「萬葉集注釈巻第十六」　武智　雅一
*川口常孝氏著　萬葉作家の世界　清水　克彦
*佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著『萬葉集　各句索引』　神堀　忍

第六十四号（昭和四十二年七月）

黒人における抒情の性格　清水　克彦
人麻呂作「献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌」の考　橋本　達雄
古今の萬葉　伊藤　博
萬葉終末期における大伴家持と藤原一族（下）　神堀　忍
*澤瀉久孝博士著「萬葉集注釈巻第十七」によせて　中西　進

第六十五号（昭和四十二年十月）

情と景—叙景歌とその周辺—　清水　克彦
新嘗と大嘗のよみと意味　直木孝次郎
飛鳥白鳳遺文と古事記の文体　西宮　一民
懐風藻をめぐつて　小島　憲之
磐瀬の禊ぎと明日香の禊ぎ　山田　弘通

第六十六号（昭和四十三年二月）

序詞（枕詞）の技巧性について—文学史の問題—　北山　正迪
梅花の歌三十二首に見える「我」について　吉永　登
上代の借訓仮名と母音脱落現象をめぐつて　鶴久
「なり」の表現価値—その意欲と情緒　森重　敏

第六十七号（昭和四十三年五月）

人麻呂歌集非略体歌における季節分類—萬葉集巻八への投影—　渡瀬　昌忠
萬葉集巻十五の「書換え」をめぐつて　古屋　彰
東の大寸御門　藤原　芳男
上代文献と「虎狼」「熊狼」　曾田　文雄
*澤瀉博士著「萬葉集注釈巻第十八」　大野　晋

第六十八号（昭和四十三年七月）

スクナヒコナノ神—神統譜から締め出された神—　吉井　巌
莫囂円隣　条川　定一
沫雪の降るにや来ます—十六・三八〇四～五—　井村　哲夫
*澤瀉久孝博士著「萬葉集注釈巻第十九」によせて　犬養　孝
*「萬葉研究新見と実証」を読む　吉永　登
*吉井巌氏著「天皇の系譜と神話」　大久保　正

第六十九号（昭和四十三年十月）

萬葉集巻第十六論—その編纂意図をめぐつて—　清水　克彦
原八十島神祭歌謡をめぐる覚書　本田　義憲
日本霊異記における役行者説話の再検討　中村　宗彦
霊異記「当頭考」続貂　小島　憲之
梅花歌の作者名について　林田　正男

第七十号（昭和四十四年一月）

弔詞（追悼澤瀉久孝博士）　佐伯　梅友
「けり」の意味分化 ―その現実性と真実性と観念性―　森重　敏
「ましじ」から「まじ」への推移　後藤　和彦
「曽陀多岐　多多岐」をめぐって　本田　義寿
令集解と玉篇　西宮　一民
*中西進博士「萬葉史の研究」を読む　吉永　登

第七十一号（昭和四十四年七月）

茨田連の祖先伝承と茨田堤築造の物語　吉井　巌
「べし」の推定性 ―様相と推定と意志―　中西　宇一
萬葉集における「繁」字の用法 ―「人目をしげみ」存疑―　鶴　久
*澤瀉久孝博士著「萬葉集注釈巻二十」所感　土橋　寛
*河野頼人著　萬葉学研究・近世　木下　正俊

第七十二号（昭和四十四年十一月）

聖武勅撰説による異本の成立 ―萬葉集巻二十の悲運―　伊藤　博
母音の体制的交代　川端　善明
倭の六の御県　吉井　巌
三二二七番「秋往者」の訓　西宮　一民

第七十三号（昭和四十五年二月）

「文章は経国の大業」　小島　憲之
憶良らの論 ―罷宴歌は避宴歌か―　井村　哲夫
萬葉集巻十四東歌私見　坂本　信幸
妹背山女男の打橋　木下　正俊
淡海三船「送二戒明和尚一状」考　蔵中　進

第七十四号（昭和四十五年十月）

大伴淡等謹状　小島　憲之
ホムツワケ王 ―崇神王朝の後継者像―　吉井　巌
「宇都志意美」考　毛利　正守
『懐風藻』の撰者について ―「胡人読二懐風藻一」―その(一)　HALLA ISTVAN
「家もあらなくに」　真鍋　次郎
*西宮一民著「日本上代の文章と表記」　築島　裕
*岡田精司著「古代王権の祭祀と神話」　青木　紀元
*南信一著「萬葉集駿遠豆 ―論考と評釈―」　橋本　四郎
*山口正著「萬葉集百首歌とその研究」　井村　哲夫

第七十五号（昭和四十六年一月）

人麻呂集の皇子追悼挽歌 ―子松がうれをまたも見むかも―　渡瀬　昌忠
坂上大嬢の越中下向　大越　寛文
殺目山寸考　高橋　重敏
みみらく考　松田　修

第七十六号（昭和四十六年六月）

憶良歌巻から萬葉集巻五へ　伊藤　博
サヨヒメ誕生　吉井　巌
五幡の坂　山田　弘通
飛鳥浄御原宮 ―その位置をめぐって―　吉永　登
平城宮出土木簡所見の文選李善注　東野　治之

第七十七号（昭和四十六年九月）

泣血哀慟歌二首 ―柿本人麻呂の文芸性― 渡辺 護
憶良らの論 ―その文学の主題と構造― 井村 哲夫
捜神記の受容 ―一佚文をめぐって― 粕谷 興紀
*久米常民博士著「萬葉集の文学論的研究」を読んで 川口 常孝

第七十八号（昭和四十七年二月）

笠金村論 清水 克彦
宮人の安宿も寝ず ―巻十五・三七七一の歌の解釈について― 坂本 信幸
「袖折り返し」考 毛利 正守
萬葉集〝ムロノキ〟考 堀 勝
*清水克彦著「萬葉論集」 大久保 正

第七十九号（昭和四十七年五月）

怨恨の歌 ―大伴坂上郎女の志向する世界― 小野寺静子
霊異記「踰」の訓釈 小泉 道
「飛鳥」考 井手 至
*北山茂夫著『大伴家持』 伊藤 博

第八十号（昭和四十七年九月）

筑前国志賀白水郎歌十首に就いて 稲岡 耕二
同音読の掛詞「絲(シ)(SI)・思(SI)」について HALLA ISTVAN
萬葉集の「代」「はか」について 毛利 正守
奈良朝宮廷歌巻 ―萬葉集巻六の論― 大井重二郎
伊藤 博

第八十一号（昭和四十八年六月）

上代の文字 井手 至
出雲国風土記の成立について ―「即」の用法から― 柏木 真里
天智紀にみえる「月生」の語について 東野 治之
萬葉序歌の成立 上田 設夫
条里制より見た櫟津・永屋原・穂積の位置 大井重二郎
*木下正俊著『萬葉集語法の研究』 浅見 徹

第八十二号（昭和四十八年十月）

遊宴の花 ―額田王論― 伊藤 博
防人歌試論 身崎 寿
あゆのかぜ私見 黒川 総三
「詠鎮懐石歌」から憶良の「七夕歌」まで ―その作者と成立の背景をめぐって― 原田 貞義
*田中卓著『日本古典の研究』 植垣 節也

第八十三号（昭和四十九年二月）

「吉備津采女」と「天数ふ大津の子」 ―人麻呂作「吉備津采女死時」歌について― 神堀 忍
「身をたな知る」より覗い知る歌人高橋虫麻呂 坂本 信幸
古事記音注私見 毛利 正守
「堅塩」考 ―萬葉集訓詁の道― 西宮 一民

第八十四号（昭和四十九年六月）

『萬葉集』名義の謎 HALLA ISTVAN
幼婦(たわやめ)と言はくも著く ―坂上郎女の怨恨歌考― 橋本 達雄
枕詞「釧つく」について 米田 進
*井村哲夫著『憶良と虫麻呂』 坂本 信幸

第八十五号（昭和四十九年九月）

つつむ 橋本 四郎
丹生の山と大伴池主の公館 黒川 総三
「大池」の勝間田池説を否定する 大井重二郎

「猟路の池」榛原の説　鳴上　善治
*渡瀬昌忠著『柿本人麻呂研究　歌集編上』　橋本　達雄

第八十六号（昭和四十九年十二月）

福麻呂の宮廷儀礼歌　清水　克彦
崇神王朝の始祖伝承とその変遷　吉井　巌
語の文法的構成―畳語について―　蜂矢　真郷
*三谷栄一氏著『日本神話の基盤』　吉井　巌

第八十七号（昭和五十年三月）

志賀白水郎歌の場―歌群の構造論として―　渡瀬　昌忠
歌語りの方法　伊藤　博
「うつせみ」と「たまのを」　森重　敏
ねりのむらと　橋本　四郎

第八十八号（昭和五十年六月）

阿騎野の歌二題　吉永　登
「風をだに恋ふるはともし」私攷　長谷川信好
分間の浦考　友松　孝行
王勃集と平城宮木簡　東野　治之
中臣祐春筆萬葉集断簡について　濱口　博章

第八十九号（昭和五十年九月）

上代特殊仮名遣とは何か　森重　敏
東歌の国名判明歌相聞の配列について　辻　憲男
*橋本達雄氏著『萬葉集宮廷歌人の研究』を読む　井村　哲夫

第九十号（昭和五十年十二月）

人麻呂の作歌精神―「吾等」の用字をめぐって―　村田　正博
東歌「安可見夜麻」考　椎名　嘉郎
古代形容詞の形成に関する一つの問題―スミノエとスミヨシをめぐって―　工藤　力男
安積皇子挽歌試論　身崎　寿

第九十一号（昭和五十一年三月）

赤人の吉野讃歌―作歌年月不審の作群について―　清水　克彦
旅人の帰京行程―宮本氏説に関連して―　林田　正男
憶良における陶淵明の影響の問題―「貧窮問答の歌」をめぐって―　黒川　洋一
大仏開眼会の漢詩　蔵中　進
かげろふの石　奥村　恒哉
*伊藤博著『萬葉集の構造と成立』（上・下）　渡瀬　昌忠

第九十二号（昭和五十一年八月）

漢籍享受の問題に関して「色に出づ」考―慣用句と発想法―　小島　憲之
礪波路と之乎路　駒木　敏
令集解「古記」にみえる「魏徴時務策」考―大宰府出土木簡をめぐって―　黒川　総三
「澄」の仮名存疑　東野　治之
　　木下　正俊

第九十三号（昭和五十一年十二月）

貧窮問答の歌―短歌をめぐって―　芳賀　紀雄
赤人の吉野　坂本　信幸
ひと(人)かそ(父)おや(親・祖)―付けたり、オニ・モノ・タマ・カミについて―　森重　敏
*伊藤博氏著『萬葉集の歌人と作品』上・下二巻を読む　井村　哲夫
*吉井巌氏著『天皇の系譜と神話　二』　次田　真幸
*八木毅著『日本霊異記の研究』について　小泉　道

第九十四号（昭和五十二年四月）

古事記「訓読」の論　西宮　一民
祈年祭祝詞についての一考察　粕谷　興紀
赤人の春雑歌四首について　清水　克彦
「おぼのびに」と「とぼしろし」
—付けたり、「をぐがきぎし」—　森重　敏
*北山茂夫著『続萬葉の世紀』　東野　治之

第九十五号（昭和五十二年八月）

赤人における叙景形式の変遷
—仮称「原赤人集」の構造から—　清水　克彦
上代における道祖神の呼称について　井手　至
ヌバタマの語源　田中みどり

第九十六号（昭和五十二年十二月）

萬葉歌の技法　神田　秀夫
「諸弟らが練の村戸」試案
—歌と人名—　坂本　信幸
「菟然—ムセカ」（日本霊異記）について　田中　久美
遊仙窟の注者達とその出自
—ロナルド・イーガン氏の論文に関連して—　長田　夏樹
*蔵中進著『唐大和上東征伝の研究』　東野　治之

第九十七号（昭和五十三年六月）

遣新羅使人悲別贈答歌十一首の構成　大濱　眞幸
進上諸国防人歌の序列　藤原　芳男
江戸期の萬葉博物の研究について
—萬葉動植考を中心に—　和田　義一
道場法師譚の形成　寺川眞知夫
*大濱厳比古著　萬葉幻視考　坂本　信幸

第九十八号（昭和五十三年九月）

萬葉語をめぐつて　小島　憲之
「月の船」・「桂梶」考
—その発想と周辺—　佐藤美知子
平城京出土資料よりみた難波津の歌　東野　治之
*稲岡耕二著『萬葉表記論』　西宮　一民

第九十九号（昭和五十三年十二月）

「鴨山」の歌とその周辺　土橋　寛
カグハシ考　松本　剛
仮名文書の成立以前　続
—正倉院仮名文書・乙種をめぐって—　奥村　悦三
美努岡万墓誌の述作
—『古文孝経』と『論語』の利用をめぐって—　東野　治之

第百号（昭和五十四年四月）

萬葉集に於ける単語連続と単語結合体　毛利　正守
古事記の表記
—同語異表記によせて—　榎本　福寿
*守屋俊彦氏著『続日本霊異記の研究』を読む　小泉　道

第百一号（昭和五十四年七月）

推古紀の「玄聖」について　粕谷　興紀
「あり」を前項とする複合動詞の構成　内田　賢徳
*仏像と仏式斎会と島の宮の文学
—渡瀬昌忠氏『柿本人麻呂研究』を読む—　中川　幸廣

第百二号（昭和五十四年十二月）

「サネ・カツテ」再考　毛利　正守
「可〻良波志」の「〻」　犬飼　隆
「懊」か「隩」か　黒川　総三

第百三号（昭和五十五年三月）

石見相聞歌と人麻呂伝
—作品論による伝記の再検討—　稲岡　耕二
形状言による副詞句の形成　工藤　力男
不幸短命考—定恵伝研究ノート—　三間　重敏

第百四号（昭和五十五年七月）

梅の花雪にしをれて—勝宝五年正月四日の宴歌三首—　渡辺　護
萬葉集・旋頭歌の字余り　毛利　正守
対義語ヒロシ・セバシとその周辺　蜂矢　真郷
いへ・やど・やね　吉井　巌
「風をだに」考
—長谷川信好氏論文に寄せて—　川村幸次郎

第百五号（昭和五十五年十二月）

萬葉集短歌の定型の問題—第一句不足音句の訓について—　西田　悦子
風をだに恋ふるはともし続貂
—準体言の視点—　大藤　重彦
天武天皇所生皇子生年考証　寺西　貞弘

第百六号（昭和五十六年三月）

「片歌」をめぐって
—旋頭歌の成立序説—　神野志隆光
「軍王」再考　生田　周史
「カタル」の語義補稿　土橋　寛
萬葉集の字余り
—そのひとつの形—　毛利　正守
*川端善明著『活用の研究』　浅見　徹

第百七号（昭和五十六年六月）

古代日本語の光感覚—語根 kag- をめぐる意味の構造—　木村　紀子
「折る」と「惜し」—萬葉集三九〇四番歌の解釈をめぐって—　山本　登朗
一音節被覆形—露出形のアクセント—〝金田一法則〟の例外について—　蜂矢　真郷
萬葉集ヤ・ワ行の音声
—イ・ウの場合—　毛利　正守

第百八号（昭和五十六年九月）

巻七雑歌「詠月」歌群の構造
—臨場表現から—　渡瀬　昌忠
風をだに恋ふるはともし
家伝下と王莽伝　藤原　芳男
恋はかなし　三間　重敏　橋本　四郎

第百九号（昭和五十七年二月）

旋頭歌試論　神野志隆光
神婚譚発生の基盤　中川ゆかり
巻十一、二五一〇～二の問答歌三首について　岡嶌　秀仁
「物念」の訓読をめぐって　毛利　正守
人並に我もなれるを　井村　哲夫

第百十号（昭和五十七年六月）

海　上（うなかみ）
—萬葉集を中心に—　阪倉　篤義
「命」考—萬葉集を中心に—　岡内　弘子
丘墓之所—書紀述作の一問題—　村田　正博
仙覚「乃」を「之」に改めること　北谷　幸冊
*大久保正氏の著作について—文献学的実証の一途に賭けた人—　伊藤　博

第百十一号（昭和五十七年九月）

萬葉集七夕歌の配列と構造　井手　至
冠纓神社友安家蔵「萬葉集巻十五断簡」—新発見天治本の紹介—　岡内　弘子
翻刻（および影印）冠纓神社友安家蔵「萬葉集巻十五断簡」　佐藤　恒雄

第百十二号（昭和五十八年一月）

うたと文字 ―つなぎことば「惻隠」をめぐって― 丸山 隆司
萬葉集中の国守たち ―家持の内舎人から越中守時代について― 佐藤美知子
『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿(一) 蜂矢 真郷
『文華秀麗集』詩注 ―第一回 第(1)の詩― 小島 憲之
*倉野憲司博士著『古事記全註釈』(全七巻) 粕谷 興紀

第百十三号（昭和五十八年三月）

アメノシタの用法 遠山 一郎
類聚古集の片仮名訓書入 山崎 福之
『萬葉代匠記』所引の漢籍をめぐって 井野口 孝
『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿(二) 蜂矢 真郷
『文華秀麗集』詩注 ―第二回 第(2)の詩― 小島 憲之

第百十四号（昭和五十八年七月）

上代語と平安時代漢文訓読語との関係について 築島 裕
吉備津采女挽歌読解の一つの試み 川島 二郎
大崎の神の小浜 吉井 巌

第百十五号（昭和五十八年十月）

「見る・見ゆ」と「思ふ・思ほゆ」 ―『萬葉集』におけるその相関― 内田 賢徳
古事記そのものが語る古事記の成書過程 ―「以音注」を手がかりに― 木田 章義
『庾信集』と威奈大村墓誌 東野 治之
『文華秀麗集』詩注 ―第三回 第(3)の詩― 小島 憲之

第百十六号（昭和五十八年十二月）

大伴書持追和の梅花歌 橋本 四郎
萬葉集のアメノシタと葦原水穂国 遠山 一郎
島の宮舎人等挽歌の構成 平舘 英子
『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿(三) 蜂矢 真郷

第百十七号（昭和五十九年三月）

大伴家持の手法 伊藤 博
新撰萬葉集の形成 ―上巻第一次編集本の復原― 山崎 健司
「古京遺文」(正・続)索引 井村 哲夫

第百十八号（昭和五十九年六月）

憶良の熊凝哀悼歌 芳賀 紀雄
黄河考―新撰萬葉集漢詩の手法― 田中 大士
岩崎本『推古紀』『皇極紀』における裏書・頭注・脚注・傍注について ―一条兼良の書紀学― 蔵中 進
『文華秀麗集』詩注 ―第四回 第(4)の詩― 小島 憲之

第百十九号（昭和五十九年十月）

防人歌群 伊藤 博
出会いの表現 中川ゆかり
萬葉集巻第三 四三一番歌の結句について 大島 信生
『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿(四) 蜂矢 真郷

第百二十号（昭和五十九年十二月）

表現の類型化
—季節との関わりにおいて—　浅見　徹
萬葉集巻一の八番「今者許藝乞菜」の訓読をめぐって　毛利　正守
「古金石逸文」索引　蔵中しのぶ

第百二十一号（昭和六十年三月）

『金砂子切萬葉集』　横山繁之助記念館所蔵
序歌の変遷—人麻呂から赤人へ—　清水　克彦
志貴皇子子孫の年譜考
—市原王から安貴王へ—　大森　亮尚
常陸国風土記「建借間命」説話の杵島唱曲をめぐって　橋本　雅之
和語、訓読語、翻読語　奥村　悦三
萬葉二七五六番の「借有命」の訓みについて　毛利　正守
君不座者心神毛奈思　大島　信生
毛無乃岳の所在　大井重二郎
*青木生子著『萬葉挽歌論』を読む　渡辺　護

第百二十二号（昭和六十年八月）

〝磐姫皇后の歌〟の再検討　土橋　寛
古代日本語における畳語の変遷
—イトドからイトイトへ—　工藤　力男
/O/／/O/対立崩壊に際しての有坂・池上法則の歴史的役割と意義　釘貫　亨
*水島義治著「萬葉集東歌の研究」「萬葉集東歌の国語学的研究」「萬葉集東歌本文研究並びに総索引」　浅見　徹

第百二十三号（昭和六十一年二月）

大宰帥大伴卿讃酒歌十三首　井村　哲夫
萬葉集「与」の表記について
—助詞トの場合—　大島　信生
萬葉の言（コト）　内田　賢徳
萬葉集中に見える用字「心神」に就いて　桜井美智子

第百二十四号（昭和六十一年七月）

萬葉集巻十四の原資料について　品田　悦一
縮重複・一部重複続考　—合わせて工藤氏に対して述べる—　蜂矢　真郷
桜「落チル」と桜「散チル」をめぐって—花『チル』の訓字の一断面—　板垣　徹

第百二十五号（昭和六十二年二月）

「天飛ぶや　軽の道は」の構想　平舘　英子
譬喩歌における表現形式の混乱について—巻三・四を中心に—　上森　鉄也
三野王に関する基礎的考察—その識別及び馬との関りについて—　藤原　茂樹
「空蟬与人」の訓釈をめぐって　大島　信生

第百二十六号（昭和六十二年七月）

中世萬葉擬歌とその周辺　片桐　洋一
秋の雨に濡れつつ居れば—巻八編者の和歌配列の一端を巡って—　生田　周史
『萬葉代匠記』と『性霊集抄』
—「代匠」との関連において—　井野口　孝
『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿（五）　蜂矢　真郷

第百二十七号（昭和六十二年九月）

大伴家持作四一六九・七〇番歌の賀歌性　大濱　眞幸
新撰萬葉集の形成
—下巻を中心として—　山崎　健司
東歌「可保夜我奴麻」考　椎名　嘉郎
*藤原芳男氏著「萬葉作品考」　村山　出

第百二十八号（昭和六十三年二月）

萬葉の人格 ―遣新羅大使阿倍継麻呂の歌― 伊藤 博
ウケヒの論理とその周辺 ―語彙論的考察― 内田 賢徳
隴頭秋月明らかなり ―萬葉学会みちのくの旅補注― 小島 憲之
『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿（六） 蜂矢 真郷

第百二十九号（昭和六十三年八月）

人麻呂歌集の略体歌と訓読漢字 ―「行行」の歌と文選・爾雅― 渡瀬 昌忠
「正倉院文書」に於ける名詞の萬葉仮名表記 桑原 祐子
*橋本達雄氏著『大伴家持作品論攷』の世界 佐藤美知子

第百三十号（昭和六十三年十二月）

『古事記』声注の一考察 ―音仮名対象の声注を中心に― 山口 佳紀
係助詞ハの終止用法 ―上代― 内田 賢徳
言ふすべのたづきもなきは吾ア身なりけり ―省約準体言の軌跡― 大藤 重彦
萬葉集巻十・一八九〇「思御」存疑 吉野 政治
孤立する訓仮名 ―憶良「老身重病歌」の「裳」― 工藤 力男
憶良の「経紀」再々考 小島 憲之

第百三十一号（平成元年三月）

書かれた言葉・書かれない言葉 ―古体表記と分節性― 稲岡 耕二
人麻呂歌集略体歌の助辞表記 ―文字化と読添え― 渡瀬 昌忠
倭太后の歌一首について 吉井 巌
しが鰭は我れにかき向け 伊藤 博
山のたをり ―その縁語的発想― 春日 和男

第百三十二号（平成元年七月）

萬葉の「我が身」の歌をめぐって 青木 生子
「つぎねふ山背道」の歌 ―ある夫婦情愛問答歌の素材とその背景― 井村 哲夫
『常陸国風土記』の割注と漢籍の注 ―「今」を含む説明形式を中心に― 橋本 雅之

第百三十三号（平成元年九月）

いにしへに恋ふらむ鳥はほととぎす ―額田王の弓削皇子との贈答歌― 身崎 寿
職名表記から見た萬葉集 ―末四巻の場合― 朝比奈英夫
家持への蔭位制の適用について 町野 修三
「馬莫疾打莫行」攷 竹田純太郎

第百三十四号（平成元年十二月）

枕詞の技法 阿蘇 瑞枝
赤人作歌の和歌史的位置 清水 克彦
古事記、古語拾遺の「之」 吉井 巌
『日本書紀』「神代」の章段区分諸説をめぐって ―基礎的整理として― 神野志隆光
上代の命令法をめぐって 竹田純太郎

第百三十五号（平成二年三月）

山上憶良 ―老身重病経年辛苦及思児等歌― 芳賀 紀雄
人麻呂歌集略体歌の助辞表記（続） ―文字化と読添え― 渡瀬 昌忠
かなで書くまで ―かなとかな文の成立以前― 奥村 悦三
漢語の摂取 ―漢語「立春・立秋」と「春立つ・秋立つ」など― 小島 憲之

第百三十六号（平成二年七月）

追作二首の成立
—なでしこ歌群と家持—　山崎　健司
上代のタメについて　吉野　政治
人麻呂歌集略体歌の助辞表記（完）
—文字化と読添え—　渡瀬　昌忠

第百三十七号（平成二年十一月）

古事記における訓注の性格　山口　佳紀
明日香皇女挽歌の表現と構想　平舘　英子
人妻ゆゑに—逆的に訳されるユヱについて—　吉野　政治

第百三十八号（平成三年三月）

作品としての古事記中・下巻の構造　吉井　巌
孝徳紀挽歌二首の構成と発想
—庾信詩との関連を中心に—　内田　賢徳
高橋虫麻呂の浦島伝説歌の構図　錦織　浩文
『文華秀麗集』詩注
—第五回　第(5)の詩—　小島　憲之

第百三十九号（平成三年七月）

上代のタメ・ユヱ・カラの使い分けについて　吉野　政治
「正倉院文書」に於ける女性名の表記—女性名の構成要素「—メ」—　桑原　祐子
大伴家持作「為寿左大臣橘卿預作歌」攷—「いにしへに君の三代経て仕へけり」をめぐって—　大濱　眞幸
「竹溪の山は沖沖」続貂　小島　憲之
*『土橋寛論文集』　坂本　信幸

第百四十号（平成三年十月）

神代紀天石窟の段の一問題　粕谷　興紀
家持に贈る歌
—大伴坂上郎女歌の手法—　鈴木　武晴
「明日よりは」とうたう意味　渡辺　護
文字の異同あるいは通用
—萬葉集の校訂をめぐって—　乾　善彦

第百四十一号（平成四年一月）

表箇男・中箇男・底箇男の三神　吉井　巌
人麻呂泣血哀慟歌の異伝と本文
—「宇都曽臣」と「打蟬」—　鉄野　昌弘
「完了の助動詞」考
—萬葉集のヌとツ—　吉田　茂晃

第百四十二号（平成四年四月）

タカヒカル・タカテラス考　橋本　達雄
人麻呂挽歌の一考察
—石中の死人を見る歌—　三田　誠司
古事記上巻「神参拾伍神」考　西宮　一民
*本田義寿著『記紀萬葉の伝承と芸能』を読む　駒木　敏

第百四十三号（平成四年六月）

上代日本語の母音変化
—V2≠V3、V3＝V4の場合—　毛利　正守
「かざし（す）」と歌うこと　平舘　英子
『日本書紀』三則
—その本文に即して—　小島　憲之

第百四十四号（平成四年九月）

日本霊異記と続日本紀　小泉　道
古事記上巻、岐美二神共に生める「嶋・神参拾伍神」考　毛利　正守
宴の席　意吉麻呂の物名歌　浅見　徹

第百四十五号（平成五年一月）

巻一・二五番の天武天皇御製歌の成立過程について　坂本　信幸
池主の〝敬和歌〟をめぐって—天平十九年家持・池主の長歌贈答—　大越　喜文

第百四十六号（平成五年四月）

萬葉集存疑訓注—枕詞「味凝」のことなど—　木下　正俊
柿本人麻呂の臨死歌群の成立についての一つの推考　吉井　巌
人麻呂歌集非略体歌七夕歌群—七夕以前の十数首について—　渡瀬　昌忠
*内田賢徳著『萬葉の知—成立と以前—』を読む　伊藤　益

第百四十七号（平成五年七月）

古事記における訓仮名の役割　山口　佳紀
「存続の助動詞」考—萬葉集の「り」について—　吉田　茂晃
『逸文上宮記』の「一云」とヤマトタケル大王系譜　西條　勉

第百四十八号（平成五年十月）

日本霊異記上巻の書式について—金剛三昧院本の誤写から—　乾　善彦
大伴家持と池主の贈答—池主の戯歌を中心に—　西　一夫

第百四十九号（平成六年二月）

萬葉の海—航海　益田　勝実
赤人作歌一首の疑義を質す—騎射行事の成立と展開を通じて—　井村　哲夫
人麻呂歌集旋頭歌における叙述の位相　品田　悦一

第百五十号（平成六年五月）

〜キと〜ギ　蜂矢　真郷
尊敬の助動詞マス（イマス）成立考—古事記の用例を通して—　吉野　政治
*神野志隆光著『柿本人麻呂研究—古代和歌文学の成立—』　遠山　一郎
*大野晋著『係り結びの研究』　浅見　徹

第百五十一号（平成六年八月）

日本書紀の記述（四）—日付け記述を中心に—　吉井　巌
万葉集の訓に変化のない異文処理の一方法—古辞書利用の効用—　鍵本　有理

第百五十二号（平成六年十二月）

大伴家持　越中に下向す—わたくしの一つの空想—　小島　憲之
桧前村と芸能—楯節舞と東漢氏—　藤原　茂樹
万葉集における母音脱落を想定した表記　吉井　健
*吉井巌氏著『天皇の系譜と神話三』　中村　啓信

第百五十三号（平成七年三月）

猿にかも似る　浅見　徹
家持における枕詞の方法　白井伊津子
『古事記』の表記—和化された字義をめぐって—　奥田　俊博
*『太田昌二郎著作集』にこと寄せて　小島　憲之

第百五十四号（平成七年七月）

七、八世紀におけるトモの表記について　直木孝次郎
—友と伴を中心に—

萬葉の歌ことば　井手　至
*人麻呂の殯宮挽歌をめぐって
—身崎壽氏著『宮廷挽歌の世界』を読む—　渡瀬　昌忠

『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿(七)　蜂矢　真郷

第百五十五号（平成七年十一月）

「賀陸奥国出金詔書歌」論　鉄野　昌弘

香具山宮と城上宮
—「殯宮之時」挽歌と殯宮設営地—　上野　誠

*渡瀬昌忠博士著『山上憶良　志賀白水郎歌群論』　村山　出

『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿(八)　蜂矢　真郷

第百五十六号（平成八年一月）

廣瀬本萬葉集
—その後のこと　など—　木下　正俊

人麻呂の表現における異文と本文
—壬申の乱の天武方軍勢の表現について—　渡瀬　昌忠

「山下風」小考　乾　善彦

黄葉片々
「此山上之」考　生田　周史

*川口常孝著『人麿・憶良と家持の論』　村瀬　憲夫

第百五十七号（平成八年三月）

『佩文韻府』を読まぬ日はなし
—漢語表現の問題をめぐって—　小島　憲之

天平勝宝八歳六月十七日大伴家持作歌六首の論　奥村　和美

*西宮一民著『古事記の研究』　山口　佳紀

*井手至著『遊文録　萬葉篇一』を読む　稲岡　耕二

第百五十八号（平成八年七月）

『萬葉集』と木簡　東野　治之

大伴家持歌の「秋黄葉」
—本文・訓と用法をめぐって—　鈴木　武晴

東歌「安之保夜麻」考　椎名　嘉郎

萬葉集歌を通して観た母音論
—イとウの場合—　毛利　正守

*山口佳紀氏著『古事記の表記と訓読』　浅見　徹

第百五十九号（平成八年九月）

アママ(雨間)考
—「体言(+の)+ま」の両義性について—　吉野　政治

『万葉集』における「去」の訓
—「ユク」「ヌ」の揺れをめぐって—　奥田　俊博

月と潮との照応
—万葉集八番「熟田津」歌考—　八木　孝昌

第百六十号（平成九年三月）

聖武天皇と海上女王の贈答歌　影山　尚之

大伴家持と越前遷任後の池主
—天平勝宝元年暮春の贈答をめぐって—　西　一夫

「紅之深染・薄染」
—色の濃淡を表す形容詞の考察から—　舘谷　笑子

第百六十一号（平成九年五月）

人麻呂における時の表現と文字　稲岡　耕二

歌の中の漢字表現
—訓字と仮名をめぐって—　内田　賢徳

「紀伊国問答歌」について　井ノ口　史

古事記アマヒ考　吉野　政治

第百六十二号（平成九年七月）

峯文十遠仁　伊藤　博
「色丹出与」（巻四・六六九番）の訓詁について　坂本　信幸
「香具山は畝傍を愛(を)しと」—新資料・林國雄「万葉考松能落葉」の三山歌論に触れて—　渡瀬　昌忠
*寺川眞知夫著『日本国現報善悪霊異記の研究』　出雲路　修
*東野治之著『長屋王家木簡の研究』　工藤　力男

第百六十三号（平成九年九月）

詠物歌の方法—家持と書持—　鉄野　昌弘
宣命の文章構造—ノリタマフ系宣命を中心に—　池田　幸恵

第百六十四号（平成十年一月）

稲置娘子と禁娘子　伊藤　博
秋風と雁—天平十八年秋の家持歌—　奥村　和美
琴歌譜の成立過程　神野　富一
*井手至著『遊文録　国語史篇一』　前田　富祺

第百六十五号（平成十年三月）

上代日本の固有名詞の表記　西宮　一民
巻九・一七九九番「尓保比去名」をめぐって　大島　信生
夕戸不知有命繼有　渡瀬　昌忠
黄葉片々内なる理由（原因）を示すカラの例外について　吉野　政治
黄葉片々木簡の「ひとつひとつ」「ひとりひとり」　犬飼　隆
*井野口孝著『契沖學の形成』　村田　正博

第百六十六号（平成十年七月）

家持の創作—興中所作歌—　小野　寛
虫麻呂の「手頴」の文字と訓について　井村　哲夫
万葉集巻十一・二四九七番歌試解—「灼然　吾名謂　嬲恃」考—　梅谷　記子
象徴詞と接頭辞—ぬなとももゆらに考—　工藤　力男
野はノかヌか—憶良の用字「農」を巡って—　馬渕　和夫
黄葉片々一五番「渡津海」歌左注の当否について　八木　孝昌

第百六十七号（平成十年十一月）

抄写—昔年の防人歌八首—　伊藤　博
修辞としての枕詞—柿本人麻呂の方法—　白井伊津子
『万葉集』訓字主体表記巻における懸詞の表記　奥田　俊博
*鶴　久著『萬葉集訓法の研究』　井手　至
『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿（九）　蜂矢　真郷

第百六十八号（平成十一年三月）

男性による女歌—万葉集における—　青木　生子
天浮橋の構造と機能　寺川眞知夫
古事記における「国神」について　姜　鐘植
万葉集仙覚本巻第二十目録の補写部について　北井　勝也
*北山正迪著『万葉試論　歌の流れと「存在」の問題』　内田　賢徳
『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿（十）　蜂矢　真郷

第百六十九号（平成十一年四月）

追悼小島憲之博士弔辞　伊藤　博
『古事記』冒頭神話の撰録過程上の考察　西宮　一民
天孫降臨神話「於天浮橋宇岐士摩理蘇理多々斯」考　井手　至
人麻呂歌集七夕歌群の構造—その第三十一首まで—　渡瀬　昌忠
頭書「反歌」「反歌〇首」の表示について　橋本　達雄
中臣宅守独詠歌　浅見　徹
遷替の運—萩の花の別れ—　伊藤　博

第百七十号（平成十一年七月）

完了辞リ、タリと断定辞ナリの成立　釘貫　亨
タチテツマヅク攷　奥村　和美
*平舘英子氏『萬葉歌の主題と意匠』　菊川　恵三

第百七十一号（平成十一年十一月）

豊旗雲に入日さし　伊藤　博
養老七年吉野離宮行幸従駕歌　垣見　修司
マヲス系宣命の文章構造　池田　幸恵
高岡市万葉歴史館蔵『伊勢物語』封入の萬葉集巻十断簡について　新谷　秀夫
*西條　勉氏『古事記の文字法』　内田　賢徳

第百七十二号（平成十二年二月）

秋詠三首—宿祢家持歌集の論—　伊藤　博
形容詞におけるミ語尾の文法性—引用と評価—　松浦　清美
射水郡駅館の位置をめぐって—万葉集から見た駅制—　黒川　総三

第百七十三号（平成十二年五月）

「二上山賦」試論　鉄野　昌弘
「熊凝哀悼挽歌」考　富原カンナ
天武諸皇子の出生順と続紀の序列基準について　武市　香織
*伊藤博氏著『萬葉集釋注』（一—十一）を読む　中川　幸廣

第百七十四号（平成十二年七月）

萬葉集と近代短歌文学　伊藤　博
天平十九年春の家持と池主の贈答—「臥病」作品群の形成—　西　一夫
助動詞「り」の承接語形について　佐野　宏

第百七十五号（平成十二年十一月）

日本語書記史と人麻呂歌集略体歌の「書き様」　乾　善彦
崇神記「我庶兄建波邇安王」の解釈—孝元・開化記婚姻系譜の一断面—　板垣　徹
「東細布空ゆ引き越し」考　井手　至
*中村啓信著『古事記の本性』　西宮　一民
*橋本達雄氏著『万葉集の時空』　村瀬　憲夫

第百七十六号（平成十三年二月）

「たどきも不知雖念」の訓義　木下　正俊
天平宝字元年十二月三形王宅宴席伝誦歌　影山　尚之
家持歌と宣命　奥村　和美

第百七十七号（平成十三年五月）

聖なる時空—三貴神分治の世界—　井手　至
ミ語尾をとらない形容詞について　松浦　清美
連体助詞「つ」の様相—上代籍帳などにおける人名を中心に—　崔　建植

副詞「かつがつ」について　吉井　健

第百七十八号（平成十三年九月）

一音節語幹の形容詞　蜂矢　真郷
「タユラニ・タヨラニ」考　宮川　久美
有間皇子自傷歌の表現とその質　大浦　誠士
梅花宴大伴百代歌の意匠　石田　正博

第百七十九号（平成十四年二月）

「日本」をめぐって　神野志隆光
巻十三の本伝と異伝　垣見　修司
古点本で見た万葉語二つ　大坪　併治
—「やくやく」と「わわく」—

第百八十号（平成十四年五月）

「わたつみの豊旗雲に」の歌の解釈　山口　佳紀
—動詞連用形の一用法に及ぶ—
己が父に似ては鳴かず　菅原　準
—「詠霍公鳥」の主題—
「勒」と「勤」　中川ゆかり
—続日本紀の場合—
*蜂矢真郷著『国語重複語の語構成論的研究』　山口　佳紀

第百八十一号（平成十四年七月）

感傷と知　内田　賢徳
序歌の意味と形式　白井伊津子

第百八十二号（平成十四年十月）

由義宮歌垣の歌謡　高松　寿夫
—「淵も瀬も」歌謡の解釈を中心に—
柿本人麻呂「石中死人歌」考　村上　亜紀
紀州本万葉集巻第十以前の系統と江家本の校異　北井　勝也
「白鳥」の訓など　山崎　健司

第百八十三号（平成十五年二月）

「わたつみの豊旗雲に…」の歌の第三句　佐佐木　隆
上代人名における語構成要素　崔　建植
—一音節形態素を中心に—
黄葉片々　犬飼　隆
壬申誓記石と森ノ内木簡の空格　神野志隆光
*木下正俊著『万葉集論考』　橋本　達雄
*村瀬憲夫氏著『萬葉集編纂の研究』
—作者未詳歌巻の論—

第百八十四号（平成十五年七月）

恋夫君歌（巻十六・三八一一～一三）の形成　影山　尚之
寧楽の故郷を悲しびて作る歌　花井しおり
—田辺福麻呂の宮廷儀礼歌—
大伴家持の吉野讃歌と聖武天皇詔　新沢　典子

第百八十五号（平成十五年九月）

和文体以前の「倭文体」をめぐって　毛利　正守
形容詞語幹の用法の違例　林　浩恵
*佐藤美知子著『萬葉集と中国文学受容の世界』　鉄野　昌弘
*古典索引刊行会編『萬葉集索引』　吉井　健

第百八十六号（平成十六年三月）

『万葉集』における「非単独母音性の字余り句」について　山口　佳紀
隠蔵杉　垣見　修司
—歌の改変と主題—
*小島憲之『國風暗黒時代の文學補篇』　内田　賢徳
読萬葉歌林　身崎　寿

第百八十七号（平成十六年五月）

万葉集をめぐる仏教的環境
—正倉院文書と万葉集—　栄原永遠男
人麻呂の死をめぐる諸問題
「標結へ我が夫」再説　清水　克彦
*乾善彦著『漢字による日本語書記の史的研究』　浅見　徹
釘貫　亨

第百八十八号（平成十六年六月）

追　慕
—「平らかにいま三年ほど十年ほど」—　青木　生子
「あしひきの　山橘の　色に出でよ」（4・六六九）付、「春風の　音にし出なば」
古今相聞往来歌訓詁二題
—二五五五・三〇二七など—　阿蘇　瑞枝
大名持神社と人麻呂歌集
—人麻呂の工房を探る（其の三）—　井手　至
万葉集十六の構造と形成　稲岡　耕二
日本古代の島と水鳥
—巣山古墳と記紀の雁産卵—　橋本　達雄
贈答歌の社会性　渡瀬　昌忠
浅見　徹

第百八十九号（平成十六年七月）

平仮名資料としてみた類聚古集
—ミセケチ訂正を通して—　遠藤　邦基
「ずは」の語法
—仮定条件句—　小柳　智一
「参」字考
—「マヰ」ということば—　土居　美幸
山上憶良の仏教受容
—維摩と釈迦の並挙表現をめぐって—　富原カンナ

第百九十号（平成十六年九月）

倭太后歌小考　生田　周史
『萬葉集』歌における枕詞・序詞と譬喩
—その関係論の試み—　白井伊津子
『類聚古集』の変容
—『袖中抄』を中心に—　景井　詳雅
ウマシクニソとウマシキクニソ
—ウマシ［シク活用］の問題から—　蜂矢　真郷

第百九十一号（平成十七年一月）

山村に幸行しし時のうた　藤原　茂樹
ム型・ブ型・ミス型動詞とミ語法の形態論的必然性による推移　竹内　史郎
黄葉片々　犬飼　隆
人名「あしへ」をめぐって　鈴木　喬
*芳賀紀雄『萬葉集における中國文學の受容』　川合　康三

第百九十二号（平成十七年四月）

巻十九巻末三首をめぐって　鉄野　昌弘
万葉集における訓字表記「未」字をめぐって　王　秀梅
「忘戸去者」訓義考　木下　正俊
*井手至著『遊文録　説話民俗篇』を読む　渡瀬　昌忠
*『渡瀬昌忠著作集』八巻・補巻一　上野　誠

第百九十三号（平成十七年七月）

萬葉集の字余りと脱落想定表記
—定型に対する共通了解の観点から—　佐野　宏
「留女之女郎」小考　鉄野　昌弘
上代官人像の形成
—『日本霊異記』上巻第二五縁について—　奥村　和美

第百九十四号（平成十八年三月）

誤字説異見余燼　木下　正俊
梨の黄葉を嘱て作る歌
―家持宴歌の一手法―　朝比奈英夫
上代における形容詞語素と二
―なぜク活用形容詞語素は単独
でニを伴わないか―　林　浩恵
*吉野政治著『古代の基礎的認識
語と敬語の研究』　乾　善彦

第百九十五号（平成十八年八月）

柿本人麻呂の表現をめぐって
「秋風ゆ妹が音聞こゆ」
―巻十・二〇一六歌の異訓をめ
ぐって―　坂本　信幸
萬葉集における撥音韻尾字音仮名
について
―連合と略音―　月岡　道晴
*廣岡義隆著『上代言語動態論』　尾山　慎
*『セミナー　万葉の歌人と作品』
の刊行を終えて　橋本　雅之
　神野志隆光

第百九十六号（平成十八年十一月）

新城と大藤原京
―万葉歌の歴史的背景―　和田　萃
上代の複数
―接尾語ラを中心に―　小柳　智一
黄葉片々
木簡にあらわれた已然形単独の
条件表現　犬飼　隆
*山口佳紀著『古事記の表現と解
釈』　内田　賢徳

第百九十七号（平成十九年三月）

「南岳」本文の可能性
―付「釋紀本」の概要―　木下　正俊
戯歌を作りて問答をなせり
―巻四・六六五～七歌―　井ノ口　史
『維摩経』受容の問題
―「方丈」の語をめぐって―　富原カンナ
*白井伊津子氏
る修辞―枕詞・序詞攷』を読ん
で　平舘　英子
*興膳　宏『古代漢詩選』　内田　賢徳

第百九十八号（平成十九年六月）

上代特殊仮名遣に関わる語彙　蜂矢　真郷
萬葉集における子音韻尾字音仮名
について　尾山　慎
*桑原祐子著『正倉院文書の国語
学的研究』　佐野　宏

第百九十九号（平成十九年十二月）

「あづまの国」の成立
―倭建命による「東方十二道」
平定が果たしたもの―　福田　武史
黄葉片々
ミハ山・飛鳥神奈備説の疑義を
質す　井村　哲夫
*橋本達雄著『万葉集の編纂と形
成』　原田　貞義
*大久保廣行著『筑紫文学圏と高橋
虫麻呂』　鉄野　昌弘
*小川靖彦著『萬葉学史の研究』　山崎　福之
*小谷博泰著『木簡・金石文と記紀
の研究』　乾　善彦

第二百号（平成二十年三月）

家持長歌における短歌との交渉　奥村　和美
「尋常」考
―漢語考証の試み―　山崎　福之

古事記「奉」字考
—「マツル」ということばー　土居　美幸
*犬飼　隆著『木簡による日本語書記史』　蜂矢　真郷
*橋本雅之著『古風土記の研究』　中川ゆかり

む

村上　亜紀　182
村瀬　憲夫　*156 *175
村田　正博　90 110 *165
村山　　出　57 *127 *155

も

毛利　正守　74 78 80 83 100 102 104 106 107 109 120 121 143 144 158 185
望月　久貴　2
森　安太郎　9
森重　　敏　1 8 16 24 35 58 66 70 87 89 93 94
森本　治吉　17 *30
守屋　俊彦　4 *23

や　行

八木　孝昌　159 166
柳川　　清　48
山口　佳紀　130 137 147 *157 *180 186
山崎　　馨　11 17
山崎　健司　117 127 136 182
山崎　福之　113 *199 200
山田　弘通　15 22 32 54 65 76
山田　孝雄　3 17
山本徳太郎　28
山本　登朗　107

よ

横井　　博　39
吉井　　厳　4 5 10 15 22 26 34 37 *37 42 45 46 52 53 61 68 71 72 74 76 86 *86 104 114 131 134 138 141 146 151
吉井　　健　152 177 *185
吉田　金彦　32
吉田　茂晃　141 147
吉田　義孝　51
吉永　　登　1 4 6 8 *9 12 13 15 17 *20 21 27 34 38 *40 66 *68 *70 76 88
吉野　政治　130 136 137 139 150 159 161 165

わ　行

和田　　萃　196
和田　徳一　4 7 62
和田　義一　97
渡瀬　昌忠　62 67 75 87 *91 108 129 131 135 136 146 *154 156 162 165 169 188 *192
渡部　和雄　57
渡辺　　護　77 104 *121 140

30 31 33 *39
42 48 50 55
60 *74 85 87
108 116
橋本　達雄　62 64 84 *85
142 169 *183
188
橋本　雅之　121 132 *195
長谷川信好　88
蜂矢　宣朗　9 16 18 29
32 *33 43
蜂矢　真郷　86 104 107
112 113 116
119 124 126
128 150 154
155 167 168
178 190 198
*200
服部喜美子　32
花井しおり　184
花田　昌治　29
濱口　博章　1 11 *21 31
41 *49 88
林田　正男　69 91
林　浩恵　185 194
HALLA ISTVA'N　74 80
84
原田　貞義　57 82 84 *199
原田　芳起　36

ひ

久松　潜一　6 9 *38
広瀬　誠　20

ふ

福田　武史　199
福田　良輔　5 34 *62
藤原　茂樹　125 152 191
藤原　芳男　22 26 33 36
38 40 46 49
55 63 67 97
108
古屋　彰　45 63 67

ほ

堀　勝　78
本田　義憲　69
本田　義彦　5 14
本田　義寿　70

ま　行

前田　富祺　*164
正宗　敦夫　17
益田　勝実　6 149
町野　修三　133
松浦　清美　172 177
松田　修　75
松田　好夫　11 22 23 25
*44
松本　剛　99
真鍋　次郎　13 17 28 41
55 58 74
馬渕　和夫　166
丸山　隆司　112
萬葉七曜会　*33

み

身崎　寿　82 90 133 186
三田　誠司　142
三辺清一郎　14 24
三間　重敏　103 108
宮川　久美　178
宮本喜一郎　28 47
三吉　陽　4 7

田中　大士　118
田中みどり　95
田邊　幸雄　4 14

ち

崔　建植　177 183

つ

月岡　道晴　195
塚原　鉄雄　5 30
塚原　幸子　30
築島　裕　*74 114
次田　真幸　*93
辻　憲男　89
土橋　寛　3 13 21 34 39 43 50 56 *71 99 106 122
土屋　文明　*27 38
都竹通年雄　9
鶴　久　12 21 28 30 31 36 42 50 *57 66 71

て

鉄野　昌弘　141 155 163 173 *185 192 193 *199
寺川眞知夫　97 168
寺西　貞弘　105

と

土居　美幸　189 200
東野　治之　76 81 88 92 *94 *96 98 99 115 158
遠山　一郎　113 116 *150
富田　大同　4
富原カンナ　173 189 197
友松　孝行　88

な　行

直木孝次郎　*21 65 154
中川ゆかり　109 119 180 *200
中川　幸廣　101 *173
中鹽　清臣　18
中西　宇一　71
中西　進　35 38 42 44 55 60 *64
中村　茂夫　5 6
中村　啓信　*152
中村　宗彦　69
中村　幸彦　10 20
鳴上　善治　85

に

西　一夫　148 160 174
錦織　浩文　138
西田　悦子　105
西野　貞治　14 16 23 26
西宮　一民　1 27 31 32 *33 34 36 39 41 *45 49 *49 59 63 65 70 72 83 94 *98 142 165 169 *175

の

野中　春水　8

は　行

芳賀　紀雄　93 117 135
橋川　時雄　11 12
橋本　四郎　2 9 15 24

五味　智英　25 *56
小柳　智一　189 196
米田　　進　84

さ　行

西條　　勉　147
佐伯　梅友　10 *50 70
栄原永遠男　187
阪倉　篤義　2 5 17 22 *26 34 41 46 110
坂本　信幸　73 78 83 *84 93 96 *97 *139 145 162 195
桜井　　満　40 63
桜井美智子　123
佐佐木　隆　183
佐竹　昭広　1 4 5 8 12 19
佐藤喜代治　18
佐藤　恒雄　111
佐藤美知子　98 112 *129
佐野　　宏　174 193 *198

し

椎名　嘉郎　90 127 158
品田　悦一　124 149
渋谷　虎雄　4 48
島津　忠夫　33
清水　克彦　2 4 6 *21 24 27 31 37 40 43 45 54 *63 64 65 69 78 86 91 94 95 121 134 187
白井伊津子　153 167 181 190
新沢　典子　184
新谷　秀夫　171
新村　　出　2 6 11

す

菅原　　準　180
鈴木　　喬　191
鈴木　武晴　140
鈴木　虎雄　1
須田善四郎　32
諏訪　嘉子　13

せ

関守　次男　11
瀬古　　確　14

そ

曾田　文雄　9 67
薗田　香融　8

た　行

平舘　英子　116 125 137 143 *197
高木市之助　23 *23
高橋　和夫　56
高橋　重敏　75
高松　寿夫　182
武市　香織　173
竹内　史郎　191
竹岡　正夫　8
竹田純太郎　133 134
武田　祐吉　10 14 17
武智　雅一　2 7 16 *63
田島　光平　53
舘谷　笑子　160
田中　　卓　4 9
田中　久美　96

加藤　順三　2 22
金井　清一　39
門前　真一　34
上森　鉄也　125
亀井　　孝　4 17 34
川口　常孝　55 *77
川島　二郎　114
川合　康三　*191
河野　頼人　29 37 47 50
川端　善明　28 45 47 48 72
川村幸次郎　104
川村多実二　29
神田　秀夫　4 6 47 *59 96
姜　　鐘植　168
神野　富一　164
神堀　　忍　6 19 22 38 54 56 63 *63 64 83

き

菊川　恵三　*170
木田　章義　115
北井　勝也　168 182
北住　敏夫　7
北谷　幸冊　110
北山　茂夫　7 15
北山　正迪　66
木下　正俊　1 5 8 10 14 16 19 *22 23 *24 25 26 27 30 31 33 34 *35 43 44 46 46 49 *49 53 56 *71 73 92 146 156 176 192 194 197
木村　紀子　107

く

釘貫　　亨　122 170 *187
工藤　力男　90 103 122 130 *162 166
粂川　定一　68
蔵中しのぶ　120
蔵中　　進　*21 29 37 61 73 91 118
倉野　憲司　*9 *35 *48
黒川　総三　82 85 92 102 172
黒川　洋一　91
桑原　祐子　129 139

こ

小泉　　道　79 *93 *100 144
高　　壮至　53
神野志隆光　106 109 134 179 *183 *195
小島　憲之　2 *2 5 9 *15 16 17 27 29 31 34 56 *56 60 65 69 73 74 92 98 112 113 115 118 128 130 135 138 139 143 152 *153 157
小清水卓二　7
後藤　和彦　70
後藤　興善　7
後藤　利雄　24 47 49
駒木　　敏　92 *142

上野　誠　155 *192
内田　暁郎　3 7
内田　賢徳　101 115 123 128 130 138 161 *168 *171 181 *186 *196 *197
梅谷　記子　166

え

榎本　福寿　100
遠藤　邦基　189

お

扇畑　忠雄　8 16 34 *45 60
王　秀梅　192
大井重二郎　18 80 81 85 121
大浦　誠士　178
大久保　正　10 23 *44 61 62 *62 *68 *78
大越　寛文　75
大越　喜文　145
大島　信生　119 121 123 125 165
大谷　寛治　21
大坪　併治　17 21 179
大野　晋　3 12 *67
大野　保　24
大野　雍熙　12
大濱厳比古　13 15 19 *19 25 46 *54
大濱　眞幸　97 127 139
大藤　重彦　105 130
大森　亮尚　121
岡内　弘子　110 111
岡崎　義恵　25
岡嶌　秀仁　109
奥田　俊博　153 159 167
奥野　健治　4 52
奥村　悦三　99 121 135
奥村　和美　157 164 170 176 193 200
奥村　恒哉　11 14 91
長田　夏樹　96
小野　寛　166
尾埜よしゑ　1
小野寺静子　79
澤瀉　久孝　1 1 1 2 2 3 4 5 6 7 8 10 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 26 29 31 34 50
尾山　慎　195 198
尾山篤二郎　3 6

か　行

垣見　修司　171 179 186
鍵本　有理　151
景井　詳雅　190
影山　尚之　160 176 184
賀古　明　27
笠井　清　20
風巻景次郎　13 18
柏木　真里　81
春日　和男　7 17 *54 131
春日　政治　17
粕谷　興紀　77 94 101 *112 140
片桐　洋一　126
加地　伸行　31

筆者名による索引

（＊印は、書評及び新刊紹介）

あ　行

青木　紀元　*74
青木　生子　*35 132 168 188
朝比奈英夫　133 194
浅見　　徹　20 22 33 40 51 57 *81 *106 120 *122 144 *150 153 *158 169 187 188
阿蘇　瑞枝　20 37 134 188
荒木　良雄　19 36

い

飯塚　　誠　56
生田　周史　106 126 156 190
池上　禎造　4 34
池田　幸恵　163 171
石井　庄司　*26 *45
石田　正博　178
出雲路　修　*162
板垣　　徹　124 175
伊丹　末雄　17
井手　　至　5 8 13 17 20 24 26 27 29 32 39 40 41 49 *49 *53 79 81 95 111 154 *167 169 175 177 188
井手　恒雄　10
伊藤　　益　*146
伊藤　　博　1 *3 5 9 11 15 17 18 23 *25 28 31 *36 38 44 50 54 55 *58 59 64 72 76 *79 80 82 87 *110 117 119 128 131 162 164 167 169 171 172 174
稲岡　耕二　51 56 58 59 80 103 131 *157 161 188
稲村　栄一　29
乾　　善彦　140 148 156 175 *194 *199
犬養　　孝　25 *68
犬飼　　隆　102 165 183 191 196
井上　展子　43
井野口　孝　113 126
井ノ口　史　161 197
井村　哲夫　41 48 52 55 60 68 73 *74 77 *89 *93 109 117 123 132 149 166 199

う

植垣　節也　59 *82
上田　設夫　81
上田　英夫　16
上田　正昭　*61

編輯後記

○『萬葉』二百一号をお届けします。この号がお手元に届く頃は、梅雨の盛りだろうと思います。雨に濡れる紫陽花を思い浮かべながらこれを書いています。

○今号には一昨年の全国大会でご講演いただいた青木生子先生のご論文を掲載することができました。「恋・女・歌」の三位一体が万葉の本質であるという、青木先生のお考えがご論全体ににじみ出た味わい深い内容です。

○新進、栗田岳氏の論は続紀宣命の「来」表記を時間的・空間的意味を見据えて論じたものです。坂本信幸氏による浅見徹氏の著書紹介は、長く萬葉学会の編輯委員であった浅見氏のお人柄までが読む者に伝わってきます。

○前号で予告しましたように、創刊号からの通巻目次を掲載しました。執筆者の総数は二百九十六名、論文・書評などの論考は千を超えます。校正の折、上代文学研究の画期をなした多くの論文名を目で追いながら、今更ながらにこの雑誌が果たしてきた役割を確認しました。

○最終校正の最中に、東京秋葉原事件の報道がありました。人間学としての文学研究の意味を改めて考えさせられました。

○二百二号の編輯も着々と進んでいます。次号には、今年度大会の詳しい要項をお知らせする予定です。

（橋本雅之）

◇お願い◇

1　論文の投稿、書籍・論文の御寄贈は、学会本部あてにお願いいたします。

2　年会費の納入および入会申込みは、そのむねを明記のうえ会費を郵便振替で「〇〇九〇〇―七―二九一四七　萬葉学会」あてにお送りください。

3　住所変更・改姓等の届出、本誌既刊号の購入等は、清文堂出版内　萬葉学会事務室あてにお願いいたします。

投稿規程

一、投稿資格は、会員に限る。

一、内容は、萬葉集とそれに関連する各分野の研究論文とする。

一、分量は、原則として四百字詰め原稿用紙四十枚程度（ただし「黄葉片々」欄は十枚以内）とする。

一、投稿に際しては、原稿四部（コピー可）を学会本部宛に送ること。ただし、原稿は返却しない。

一、ワープロ原稿の場合は、字詰め・行数及び四百字詰め原稿用紙に換算した枚数を明記すること。論文採用の場合には、テキストファイルの提出をお願いする。

一、採否決定は、編輯委員会に一任のこと。

一、論文掲載の場合は、本誌十部を贈呈する。ただし、余分に入用の時は、あらかじめ申し出があれば実費でこれに応ずる。

一、掲載された論文等の著作権は、執筆者に帰属する。ただし、本誌「萬葉」の再版、電子化公開等については、執筆者の許可を得ないで学会が行うことができるものとする。

萬葉学会会則

一、本会は、萬葉学会と称する。

一、本会は、萬葉集とそれに関連する各分野の研究を目的とする。

一、萬葉研究者・愛好者は誰でも申込みによって会員になることができる。

一、会員の研究発表機関誌として季刊「萬葉」を編輯・発行する。

一、本会は、年一回、公開講演会・研究発表会・臨地調査研究を中心とする全国大会を行い、表彰制度を設けるなど、随時、目的に沿う事業を行う。

一、会員は、年額四千円の会費（誌代を含む）を年度初め（四月）に納入する。

一、本会の本部を

大阪市住吉区杉本三丁目三番一三八号
大阪市立大学文学部国語国文学研究室内（郵便番号五五八―八五八五）

に置く。

一、本会の運営及び機関誌の編輯・発行は編輯委員会において行う。

一、本会に代表を置く。

萬葉　第二百一号
平成二十(二〇〇八)年六月二十五日印刷
平成二十(二〇〇八)年六月三十日発行
頒価　一、〇〇〇円
送料　六〇円
558-8585 大阪市住吉区杉本三丁目三番138号
大阪市立大学文学部
国語国文学研究室内
電話　〇六(六六〇五)二四一三
編輯・発行　萬葉学会
代表者　芳賀紀雄
振替〇〇九〇〇-七-二九一四七
542-0082 大阪市中央区島之内二丁目八番五号
清文堂出版株式会社内
発売所　萬葉学会事務室
電話　〇六(六二一)六二六五